

大 坪 遺 跡

第6節 大坪遺跡

1. 遺跡の概要

1) 遺跡の立地と環境

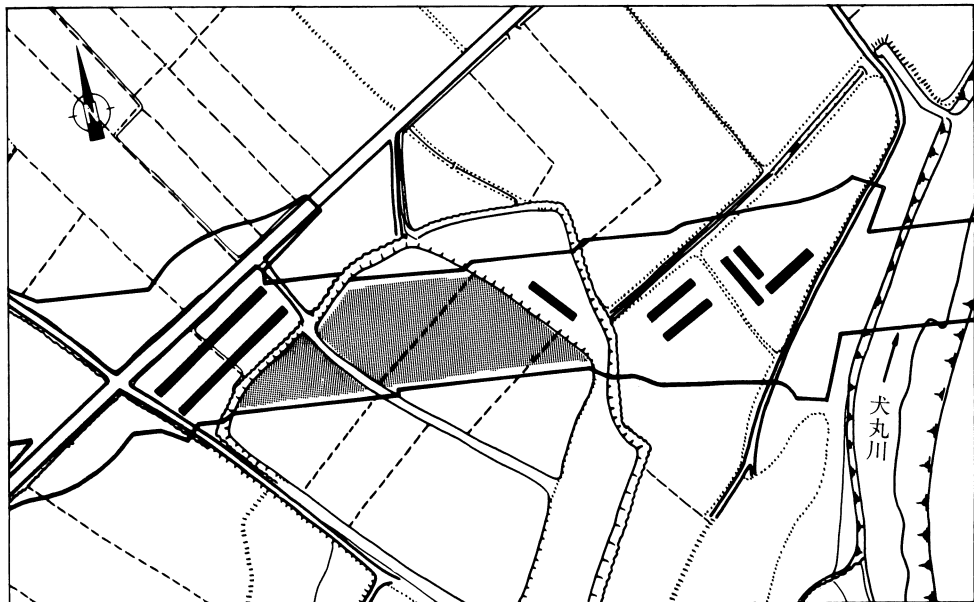
大坪遺跡は、中津市大字加来字法垣に所在する。

遺跡は標高約25mで、犬丸川左岸の自然堤防上に立地する。現在、遺跡のある自然堤防上は畑地であるが、周辺は水田が広がる。周辺の水田との比高差は約1～2mである。また、東側を流れる犬丸川との間には自然堤防より一段低い部分があり川にいたる。犬丸川川床との比高差は約7mである。調査区は自然堤防の末端部に位置し、南側すなわち川の上流に向かい自然堤防はさらに数百m続く。

2) 調査の概要

発掘調査は昭和60年10月から61年1月にかけて実施した。

まず、自然堤防上および周辺の低地部を含めた路線予定地内に11本のトレンチを設定し、試掘調査を行った。周辺の低地部では全く遺構が検出されず、遺物も近・現代までのものが散発的にみられたのみであった。これに対し、自然堤防上は遺跡の存在が当初より予想されていた。



第161図 大坪遺跡調査区位置図 (1/2000)

トーン部分が本調査区域

た。作付の関係などからトレンチを3本設定したのみであるが、住居跡や柱穴が確認されたので、ただちに全面調査を実施した。

調査面積は約 2,400m² で、旧石器時代から中世にいたる遺構・遺物がみられた。主体をなすのは古墳時代後期の集落で、10基の竪穴住居跡が確認された。いずれも平面方形で、北側あるいは東側にカマドを有し、柱穴は一棟をのぞきすべて4本柱である。このほか、掘立柱建物も5棟検出されたが、これらはいずれも古墳時代以降に位置づけられるものと思われる。また、土坑も数多くみられ、このなかには縄文時代のものや、中世の墓なども含まれる。以下、これらについての報告をするが、遺物についての詳細は、後段の観察表を参照願いたい。

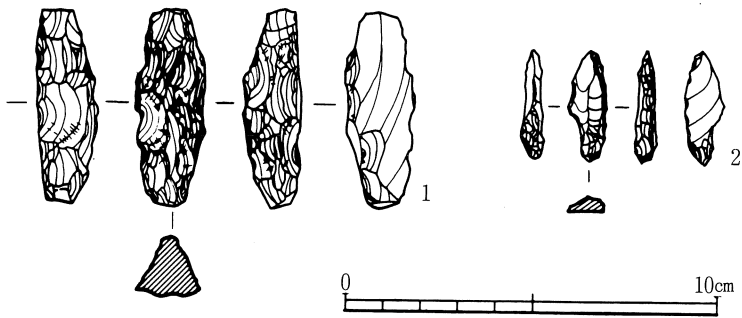
2. 遺構と遺物

1) 旧石器時代

旧石器時代に位置づけられる遺物が2点出土した。これらは、表土中や古墳時代住居跡埋土中から出土したものである。

第162図1は安山岩製の三稜尖頭器で、現存長5.2cmである。一面に大きな剝離面を残すが、他の二面は細かな調整剝離が施されている。

第162図2はチャート製のナイフ形石器で、全長2.9cmである。縦長剝片の右側全部と左側縁の一部に調整が施されている。



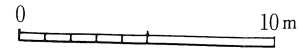
第162図 旧石器時代遺物

2) 縄文時代

縄文時代の遺構として土坑がある。このなかで、確実に縄文時代に位置づけられる遺物が出土したのは2号、4号、8号、13号土坑だけである。他は時期決定の決め手を欠くが、2号土坑などと同様、やや粘質をおびた黒褐色のしまった埋土をもつことから、縄文時代の所産である可能性が強い。



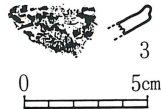
第163図 大坪遺跡遺構配置図



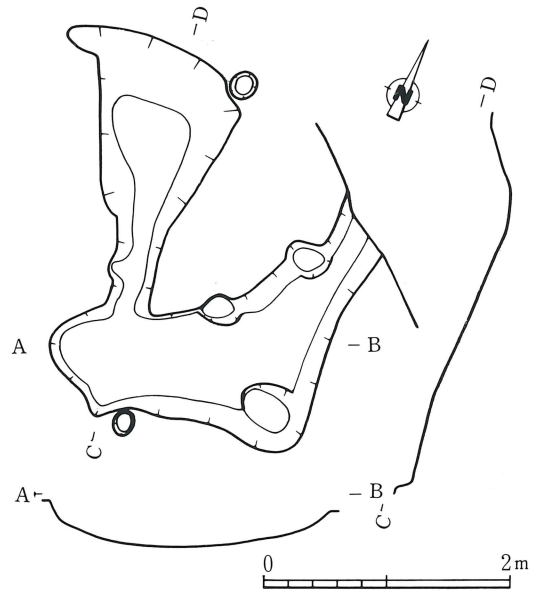
2号土坑 (第165図)

2号土坑は1号住居跡の南側にあり、1号住居跡により切られる。現状で土坑はU字形を呈するが、いくつかの土坑が切り合っている可能性もある。深さは、最も深いところで30数cmである。

出土遺物は少量で細片ばかりである。うち器形の分かるものとして、第164図3の縄文晩期浅鉢がある。口縁部が短く立ち上がるもので、外面に沈線が1条みられる。



第164図 2号土坑出土遺物実測図

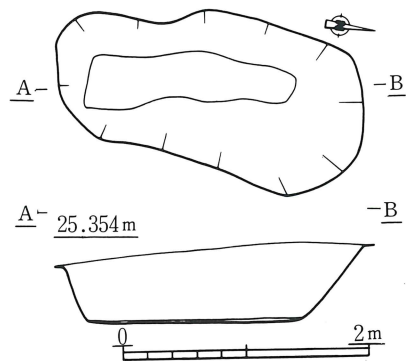


第165図 2号土坑実測図

3号土坑 (第166図)

5号土坑と重複しており、5号土坑に切られる。

形態は丸味をもつ長方形を呈し、2.6×1.2mの規模である。深さは最も深い部分で60cmである。床面はほぼ水平を呈するが、全体の大きさに比し床面積は狭い。土坑からの遺物出土は皆無であるが、黒褐色のしまった埋土であることから、縄文時代の可能性が強いものと思われる。



第166図 3号土坑実測図

4号土坑 (167図)

古墳時代の不定形土坑である18号土坑と重複する。

形状は円形で、径1.3mの規模である。深さは18号土坑により上部がカットされ現在30cm程しか壁の立ち上がりが観察できないが、かつては40cm以上あったものと推定される。また、土坑底面に柱穴状のものがいくつかみられる。

土坑内からは土器片などが比較的多く出土したが、その性格については、形状から貯蔵穴な

どの用途が考えられる。

遺物は深鉢（第168図4～7、9）と浅鉢（第168図）がある。

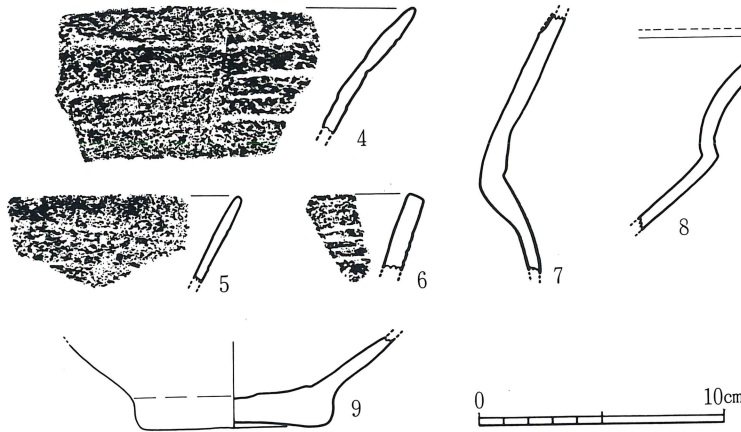
4、5は深鉢口縁部で同一個体である。頸部から口縁部が立ち上がる器形で、立ち上がり部が外方に大きく伸びる。外面には沈線がみられるが、間隔のあいた細い沈線である。

6も深鉢口縁で、口縁端部が角ばる。

7は深鉢胴部から頸部の破片で、頸部下にわずかな段がある。

8は浅鉢で、口縁外面には明瞭な沈線がない。

9は深鉢底部である。

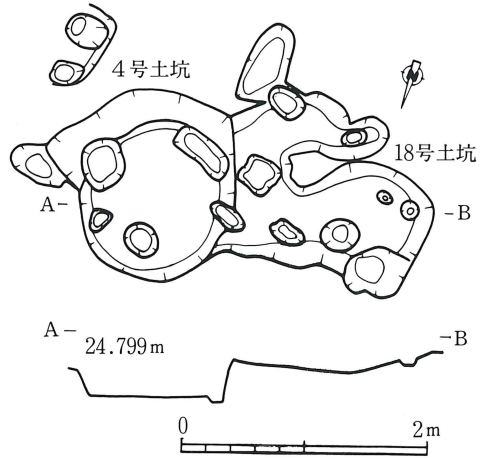


第168図 4号土坑出土遺物実測図

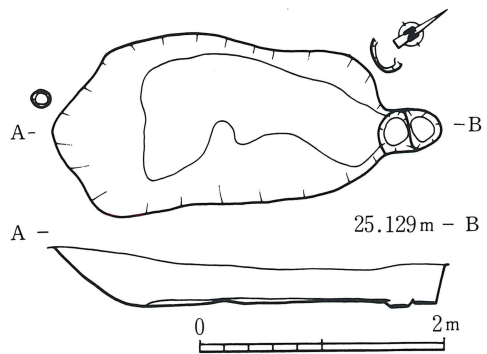
7号土坑（第169図）

4号土坑の東南に位置するもので、やや変形した長方形気味の形状を呈する。規模は2.8×1.4mで深さは最深部で約50cmを測る。全体の形は3号土坑に類似し、底面はほぼ水平である。

土坑内からは土器片・石などがわずかに出土したのみである。埋土は黒褐色のしまった土で古墳時代のものとは明らかに異なる。



第167図 4・18号土坑実測

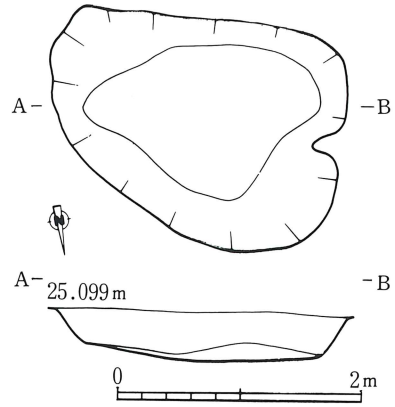


第169図 7号土坑実測図

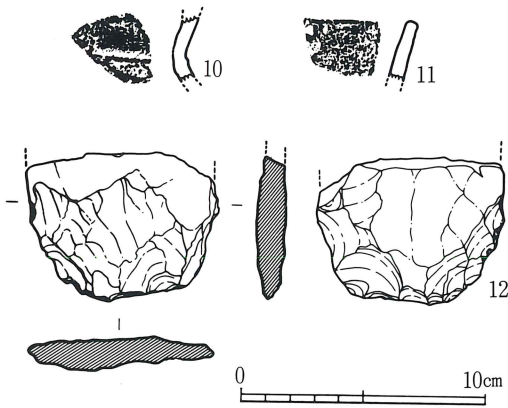
8号土坑 (第170図)

8号土坑は、7号土坑の東にある。規模は1.8×2.4m、深さ40cmで、楕円形を呈する。

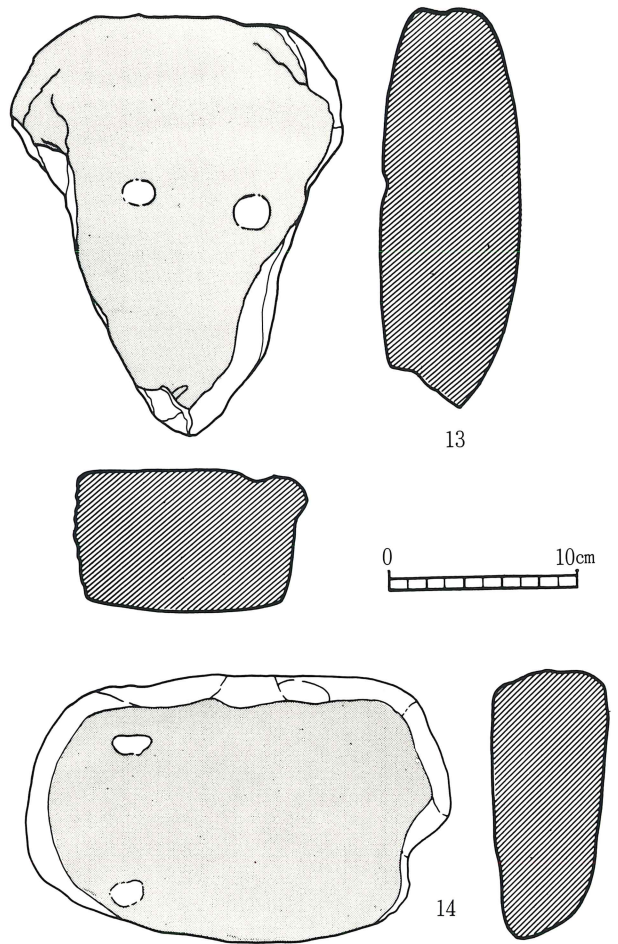
遺物は小破片が多く、土器片や姫島産黒曜石片が、いずれも流れ込みの状態出土した。第171図10、11はいずれも深鉢で、10が頸部、11が口縁部である。第171図12は打製石斧で、比較的薄手の作りをなす。第172図13、14は石皿で、片面ないしは両面に使用の痕跡がある。



第170図 8号土坑実測図



第171図 8号土坑出土遺物実測図(1)



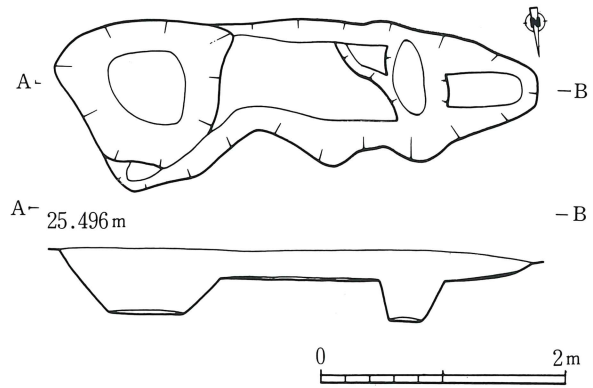
第172図 8号土坑出土遺物実測図(2)

11号土坑（第173図）

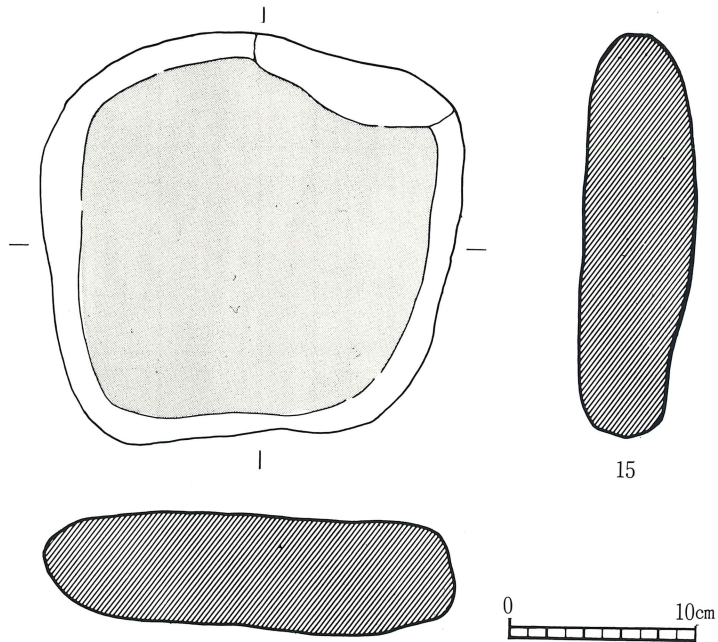
現状で長さ4m、幅0.8~1.4m、深さ20~60cmである。複数の土坑が重複している可能性もあるが、確認できていない。

土坑内からの出土遺物は、石皿と若干の土器片があるのみである。

第174図15は石皿である。約20×20cmの大きさで、厚さは約6cm。片面に使用された痕跡がみられる。



第173図 11号土坑実測図



第174図 11号土坑出土遺物実測図

12号土坑（第175図）

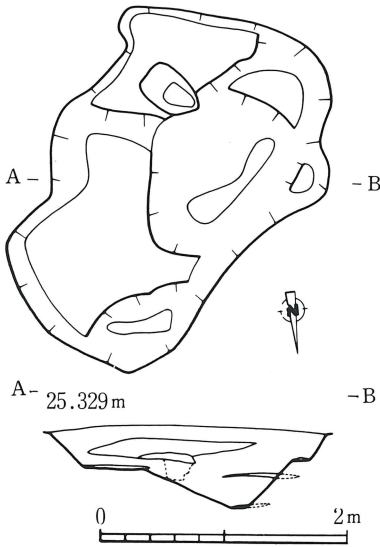
12号土坑は、約2×3mの不定形を呈する。底面の高さは一様でなく、最深部で約60cmである。

埋土は黒褐色のややしまった土で、土坑内からは若干の土器片などが出土したのみである。

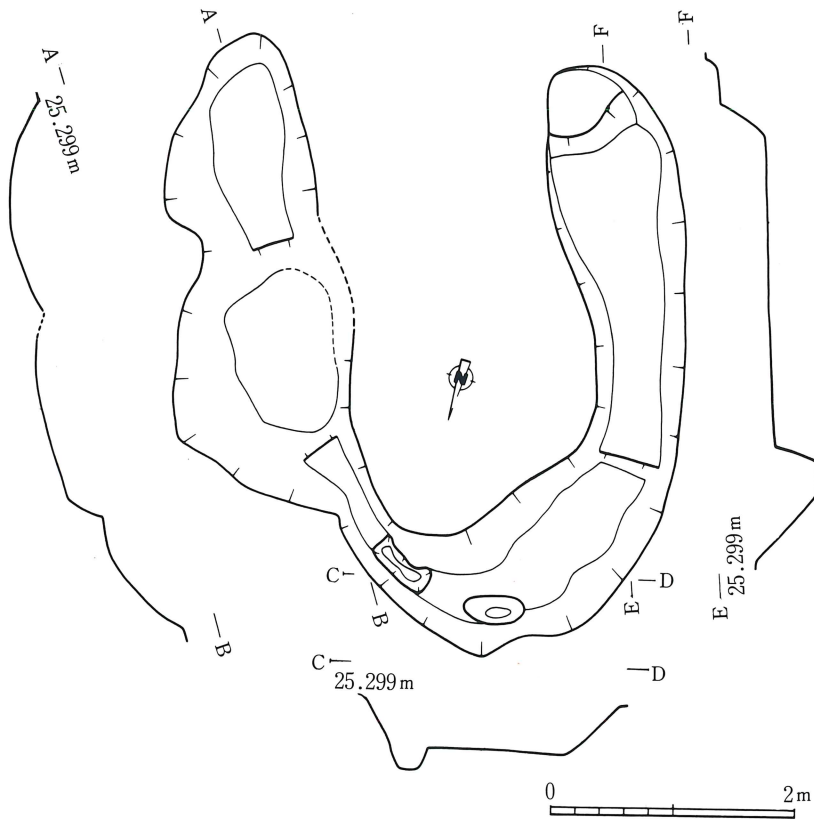
13号土坑 (第176図)

12号土坑のすぐ東側にある。現状では、幅1m程のU字型の溝状を呈する。深さは、10~60cmで様ではなく、いくつかの土坑が重複している可能性が強い。埋土は黒褐色の比較的しまった土である。遺物は土器片などが出土したが、いずれも流れ込みの状態である。

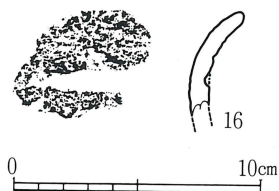
第177図16は深鉢口縁部である。大きく外反するもので、口縁部に刻みらしきものもみられる。外面はナデで、内面は条痕が施される。第178図17は磨石で、両面に使用の痕跡が認められる。



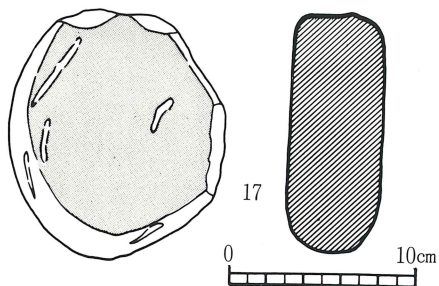
第175図 12号土坑実測図



第176図 13号土坑実測図



第177図 13号土坑出土遺物実測図(1)



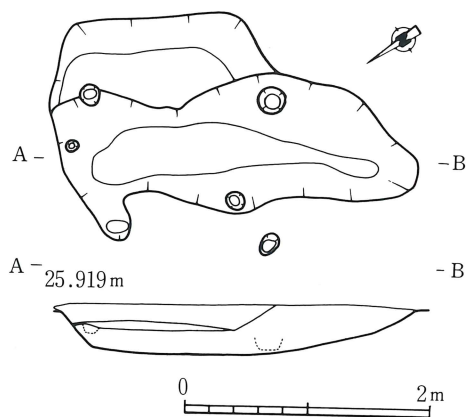
第178図 13号土坑出土遺物実測図(2)

14号土坑 (第179図)

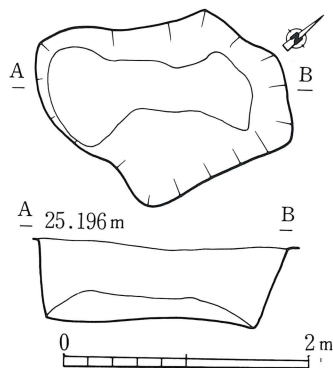
14号土坑は、13号土坑の東南側に位置する。現状では3×2mの不定形を呈するが、二つの土坑が重複している可能性が強い。最深部で、深さ約40cmである。土坑の形態的な面からみると3号、7号、8号などと似た様相をもつ。

15号土坑 (第180図)

15号土坑は2×1.5mの不定形を呈し、深さは最深部で約50cmである。埋土は暗褐色の比較的しまった土で、若干の土器片などが流れ込みの状態で出土した。土坑の形態については、3号、7号、8号、14号などと同様なタイプとしてとらえられる。



第179図 14号土坑実測図



第180図 15号土坑実測図

その他の縄文時代遺物 (第181・第182図)

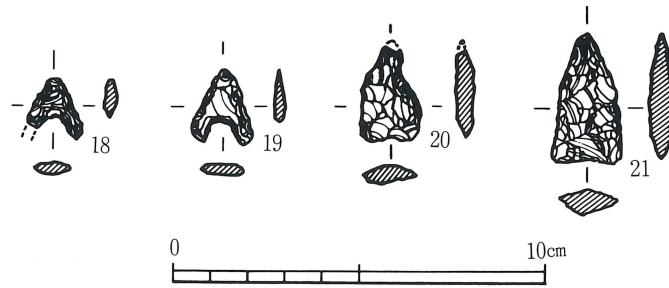
縄文時代に位置づけられるものとして、古墳時代以降の住居跡や土坑・柱穴などから石器や土器が出土している。

22は、縄文晩期浅鉢である。胴部が張り頸部がしまる。

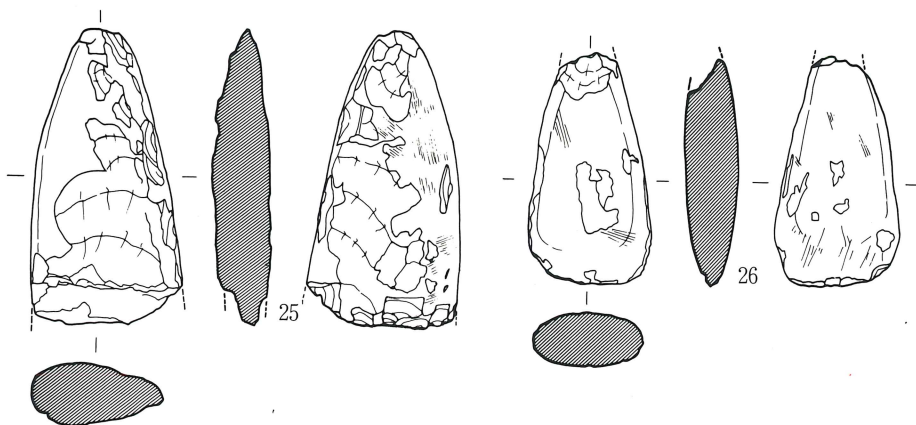
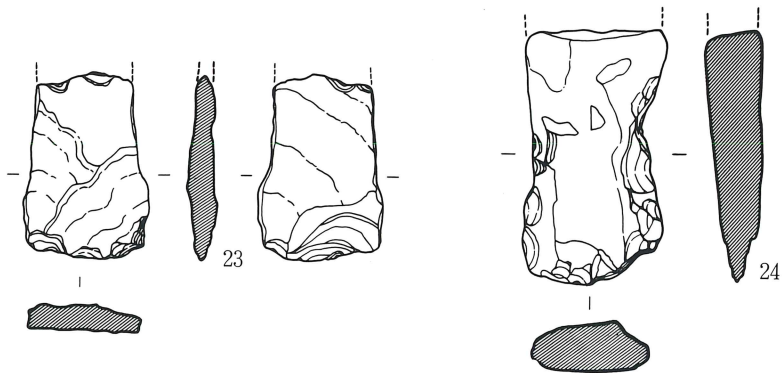
18~21は打製石鏃で、いずれも姫島産黒曜石製である。形態的には深くえぐりの入るものから五角形のものまでである。やや雑な作りの20は弥生時代の可能性もある。23、24は打製石斧で

23は比較的薄手である。

また、25、26は磨製石斧で、25は刃部が欠損する。



第181図 その他の縄文時代遺物実測図(1)

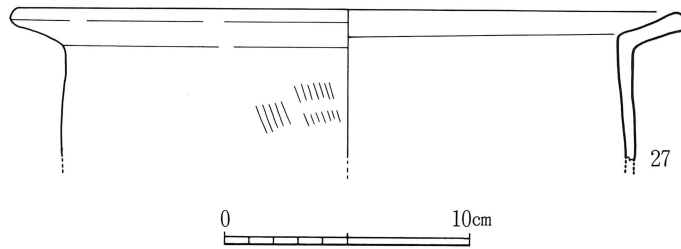


第182図 その他の縄文時代遺物実測図(2)

3) 弥生時代

弥生時代の遺構として、確実に認められるものはほとんどなく、わずかに若干のピットがそれと認められるのみである。

遺物についても図化できるものは少ない。27は表採品の甕で、口縁部が逆L字形を呈する。時期的には、弥生時代中期に位置づけられる。



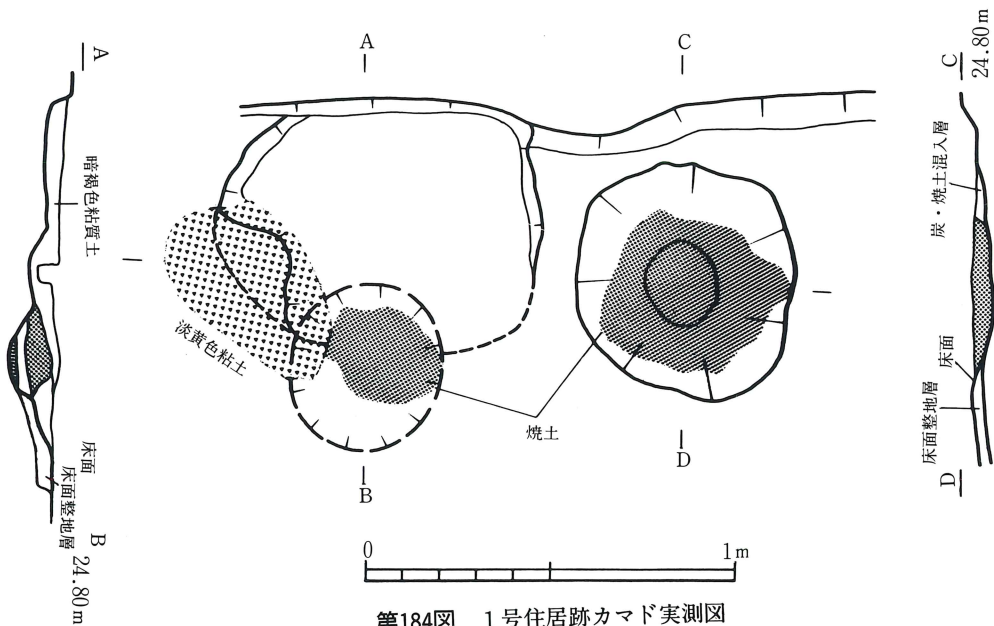
第183図 弥生時代遺物実測図

4) 古墳時代

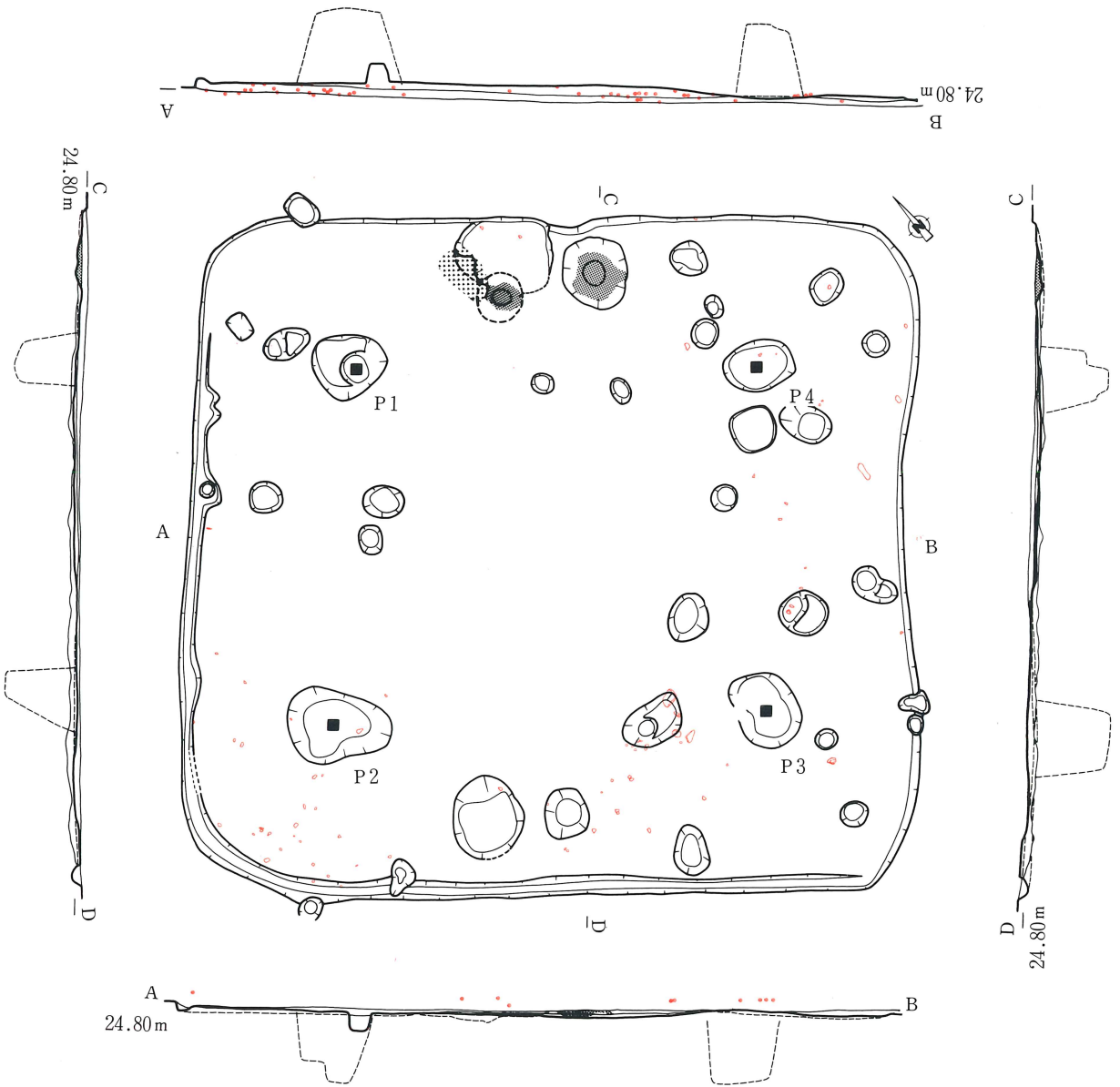
大坪遺跡で主体をなすのは、古墳時代の遺構、遺物である。遺構は10基の 堅穴住居跡のほか、土坑などがある。住居跡はすべて方形で、カマド遺構を有する。以下その概要を述べる。

1号住居跡

遺構（第184・185図）1号住居跡は2号土坑を切る。規模は一辺約6×6.5m、床面積約39m²で、方形を呈する。支柱穴はP 1～P 4の4本柱で、床面からの深さは50～60cmである。柱

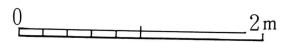


第184図 1号住居跡カマド実測図



住居跡の柱穴は支柱穴■のみ投影

第185図 1号住居跡実測図

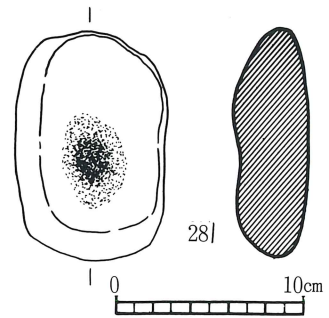


穴間の長さは、P 1・P 2 間約3.1m、P 2・P 3 間約3.8m、P 3・P 4 間約 3 m、P 4・P 1 間約3.6mを測る。また、4本の支柱穴は住居跡のコーナーを結ぶ線上にほぼ位置する。周溝は幅約10~20cm、深さ 5 cm で北西側と南西側にのみ認められる。

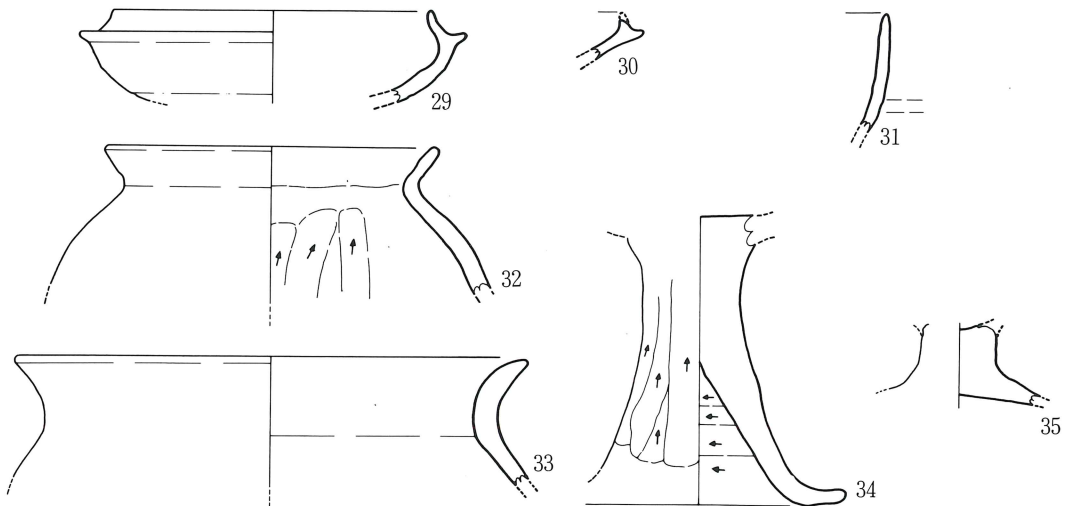
カマドは北東壁中央付近にある。しかし、削平のためカマド本体は残存しない。北東壁中央付近には焼土塊が二ヶ所みられるが、北側（第24図の左側）がカマドであると思われる。カマドは下部構造の約 70×90cm の浅い土壌のみがみられ、焚口付近には硬くしまった焼土塊がみられる。焼土の北側には厚さ 5 cm 程の淡黄色粘土層が残存しているが、カマドそで部の痕跡と推定される。一方、南側の焼土塊については、カマド本体の痕跡である粘土などがみられない点や、焼土のつまった浅い土壌が壁ぎわまで及ばないことからカマドではなく、カマドに付随する炉跡的なものと理解したい。しかし、カマドの可能性も否定しきれず、これがカマドであれば、位置を若干移動した作り替えがあったことになる。

遺物（第186・187図）遺物は比較的少なく、石器、須恵器、土師器などがある。28は凹石であるが、これについては縄文時代遺物の可能性もある。

29~31は須恵器である。29、30は坏身で、うち29は復原口径 13cm を測り、底面に回転ヘラケズリがみられる。また、31も坏であるが、体部から口縁へむかい直線的にのびる器形である。



第186図 1号住居跡出土遺物実測図(1)



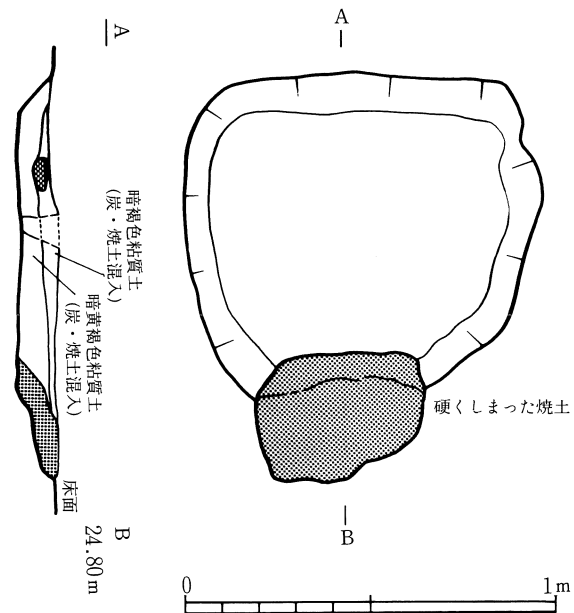
第187図 1号住居跡出土遺物実測図(2)

32～35は土師器である。32は甕で、口径に比し胴が張り、内面はヘラケズリが施される。33も甕であるが、32に比べ胴が張らないようである。34は高坏脚部で内面にヘラケズリ、外面に面取りがみられる。35は短脚の高坏脚部である。

2号住居跡

遺構（第188・189図）2号住居跡は4号住居跡を切り、3号住居跡により切られる。規模は一辺約5.4×6.6mの長方形で、床面積は約35m²である。主柱穴はP1～P4の4本柱で、床面からの深さは60～70cmを測る。柱穴間の長さはP1・P2間約3.1m、P2・P3間約3.3m、P3・P4間約3.1m、P4・P1間約3.6mで、住居跡コーナーを結ぶ線上に柱穴は位置する。周溝は、幅10～20cm、深さ約5cmで、西側が3号住居跡に切られ不明だが全周していたと思われる。

カマドは、住居跡の長辺である北西壁中央付近に位置する。削平のためカマド本体は残存せず下部構造のみがみられる。壁ぎわに約80×90cmの土塊があり、壁と反対側の焚口部と推定される位置に硬くしまった焼土がみられる。このほか、粘土などのカマド本体や煙出しの痕跡は認められなかった。

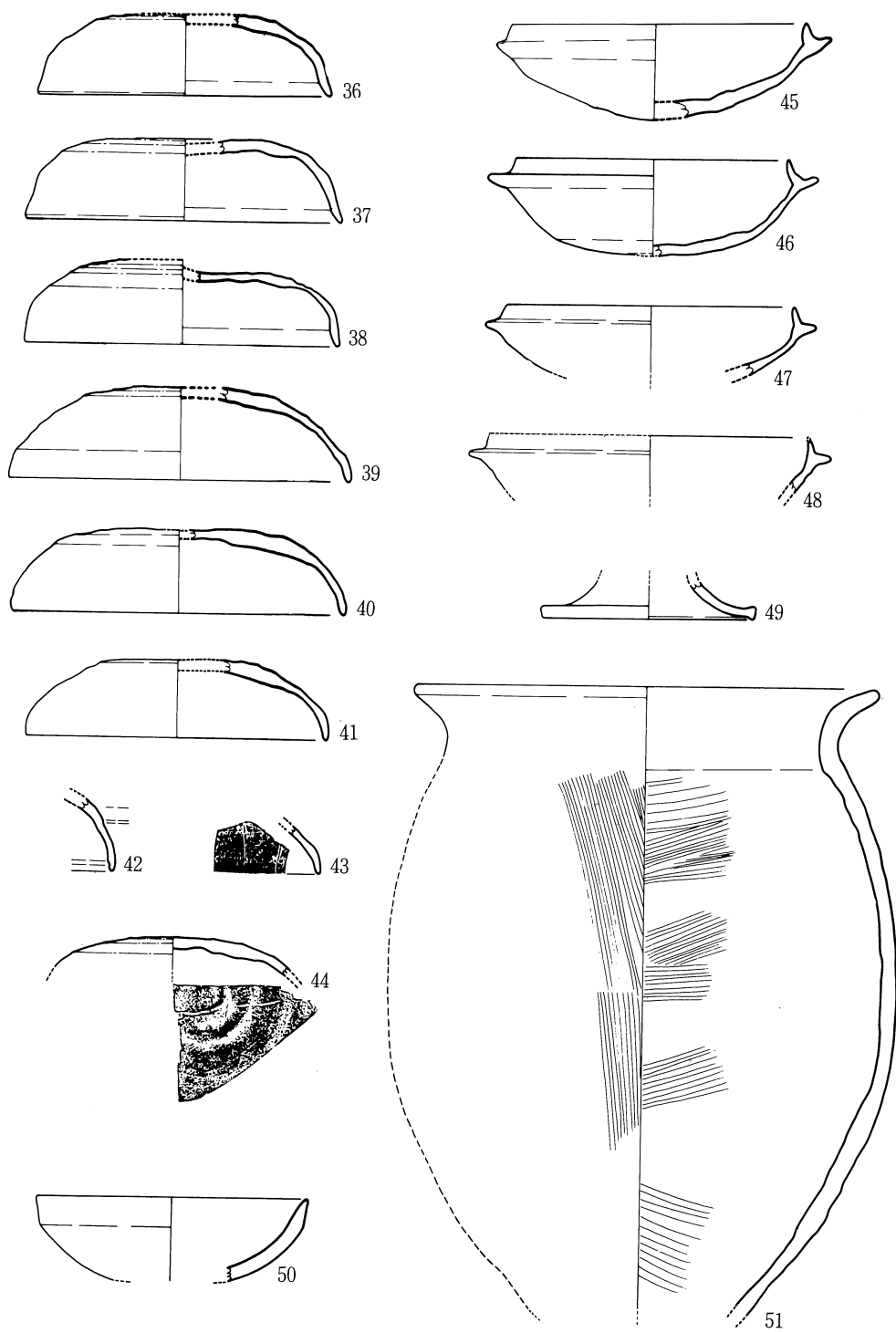


第188図 2号住居跡カマド実測図

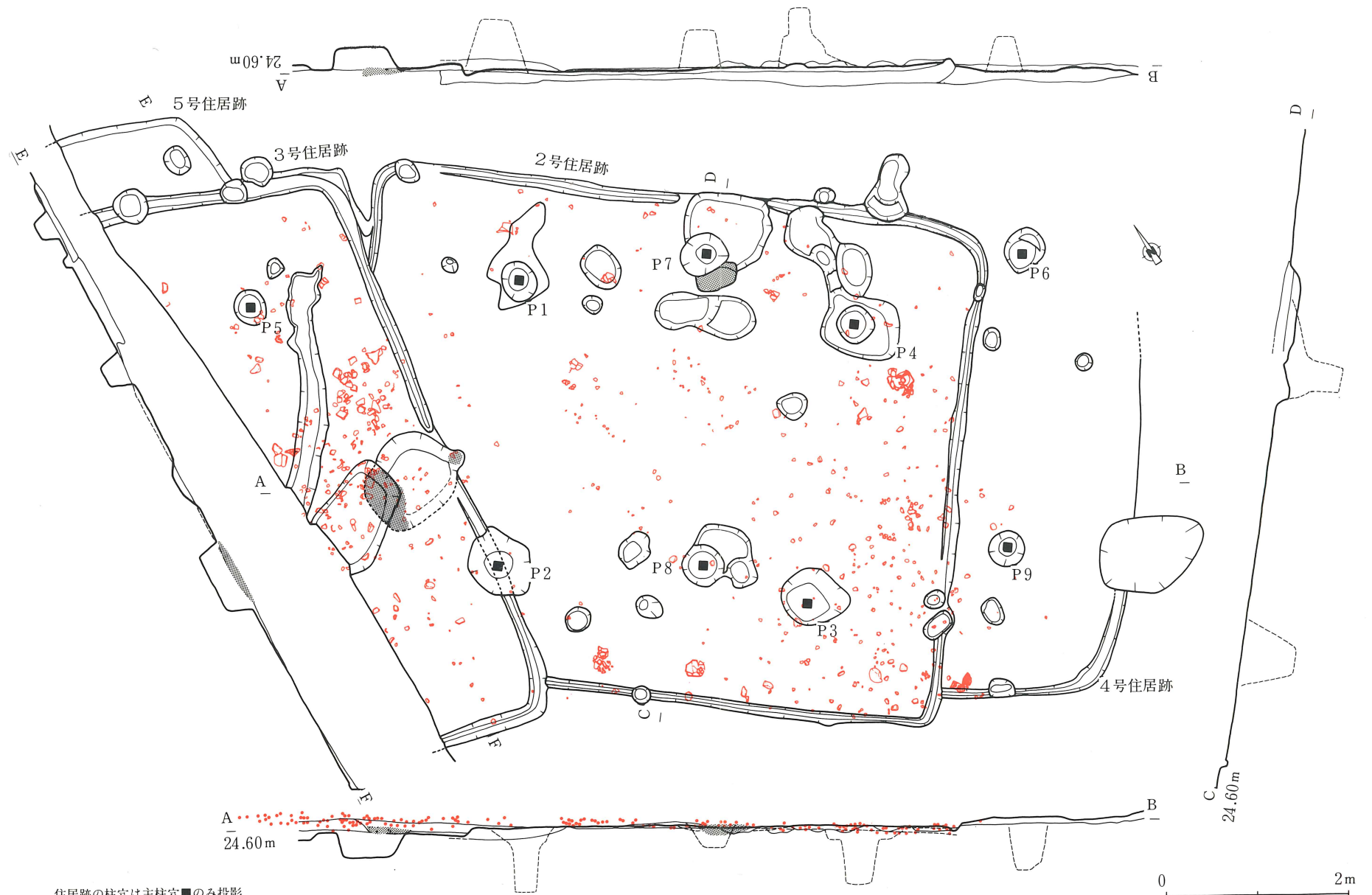
遺物（第190・191図）須恵器と土師器が出土した。

須恵器は36～49である。36～43は坏蓋で、口径を復原できるもので13～15cmを測る。その大部分が天井部に回転ヘラケズリがみられる。42は天井部との境に段がつく。43、44はいずれも内面にヘラ記号がみられる。45～48は坏身で、復原口径12～14cmを測る。49は高坏脚部で、底径9.4cmである。

50～51は土師器である。50は坏と思われるもので、復原口径12cm。51、52、54は甕である。51、54は口縁が大きく外反し、胴部中程が張り長胴形を呈しない。51は内外面ハケ調整、54は外面ハケ調整、内面ヘラケズリである。52は51、54に比べ、口縁部が短く外反する。53は甕と思われるもので、復原口径27.4cmを測る。

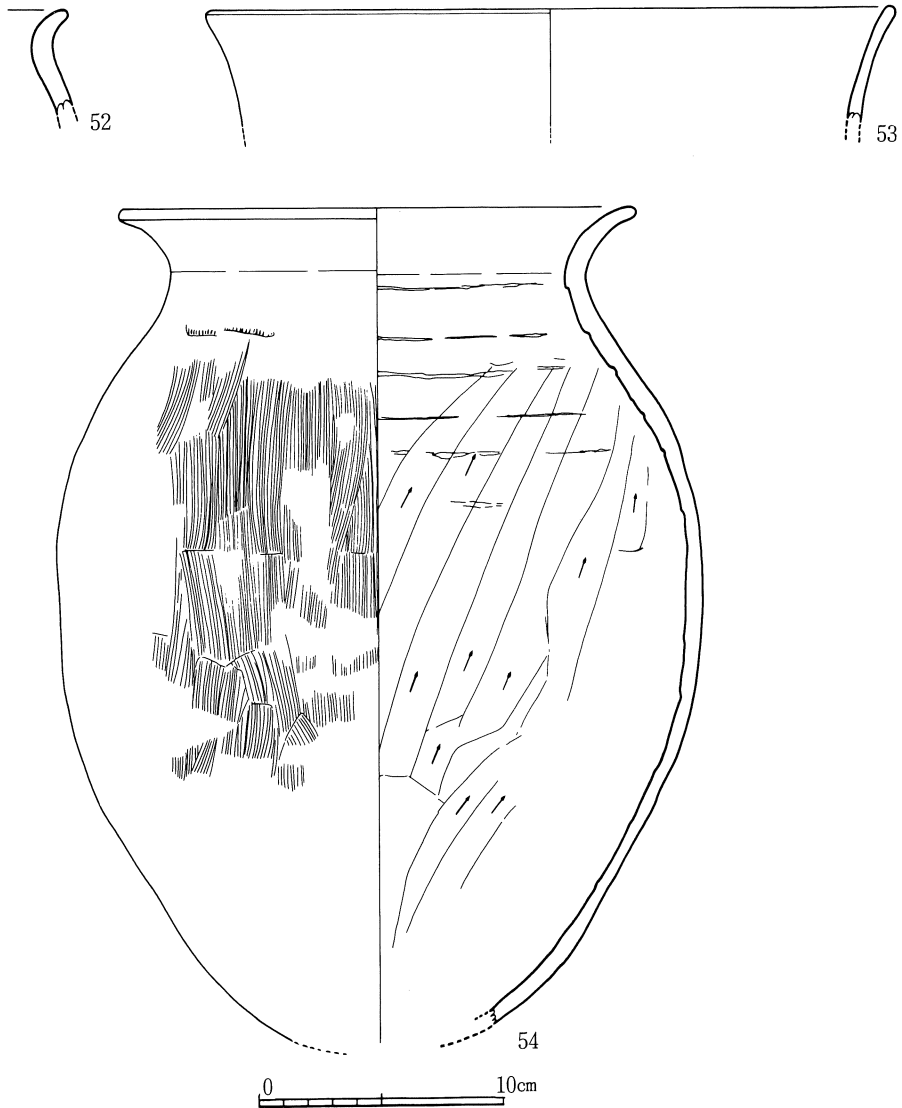


第189图 2号住居跡出土遺物実測図(1)



住居跡の柱穴は主柱穴■のみ投影

第190図 2・3・4・5号住居跡実測図



第191図 2号住居跡出土遺物実測図(2)

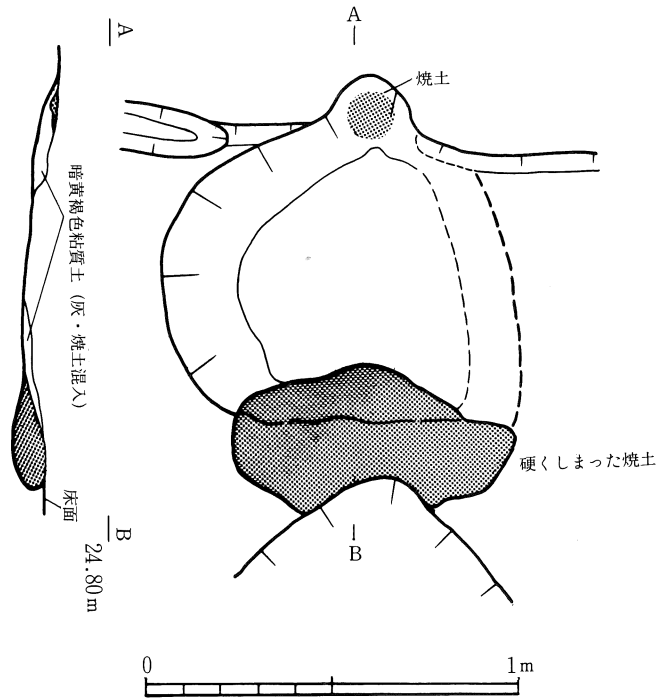
3号住居跡

遺構(第189・192図) 3号住居跡は2号住居跡と5号住居跡を切る。大部分が調査区外にあるため全体の規模は不明であるが、東北側の一辺が約6.5mを測ることから2号住居跡と同様な規模が考えられる。検出面から床面までの深さは約20cmと大坪遺跡のなかでは比較的残りがよい。柱穴は4本柱と思われるが、調査区内ではP5のみが確認された。また、壁に沿って幅約20cm、深さ約5cmの周溝が巡る。カマドは住居跡北東壁中央付近にある。削平のためカマド本体は残存せず、下部構造のみがみられる。下部構造は壁ぎわから約80×90cmの浅い土

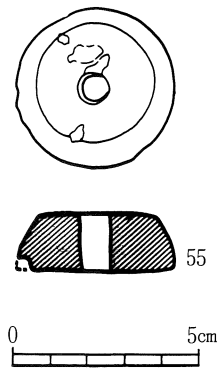
壙として認められ、焚口付近に硬くしまった焼土がみられる。また、土壌の一部は住居跡の壁から外へ張り出すが、これは煙道施設に関連するものと考えられる。

遺物(第193~195図)石製品、須恵器、土師器などが出土した。55は滑石製紡錘車である。径4.2cm、厚さ1.6cmで、中央に径約0.8cmの孔がある。56、57は須恵器坏蓋である。56は復原口径13.2cmで、天井部に回転ヘラケズリがみられる。57は復原口径13.4cmで、ヘラ切りである。58は壺の口縁部と思われ、復

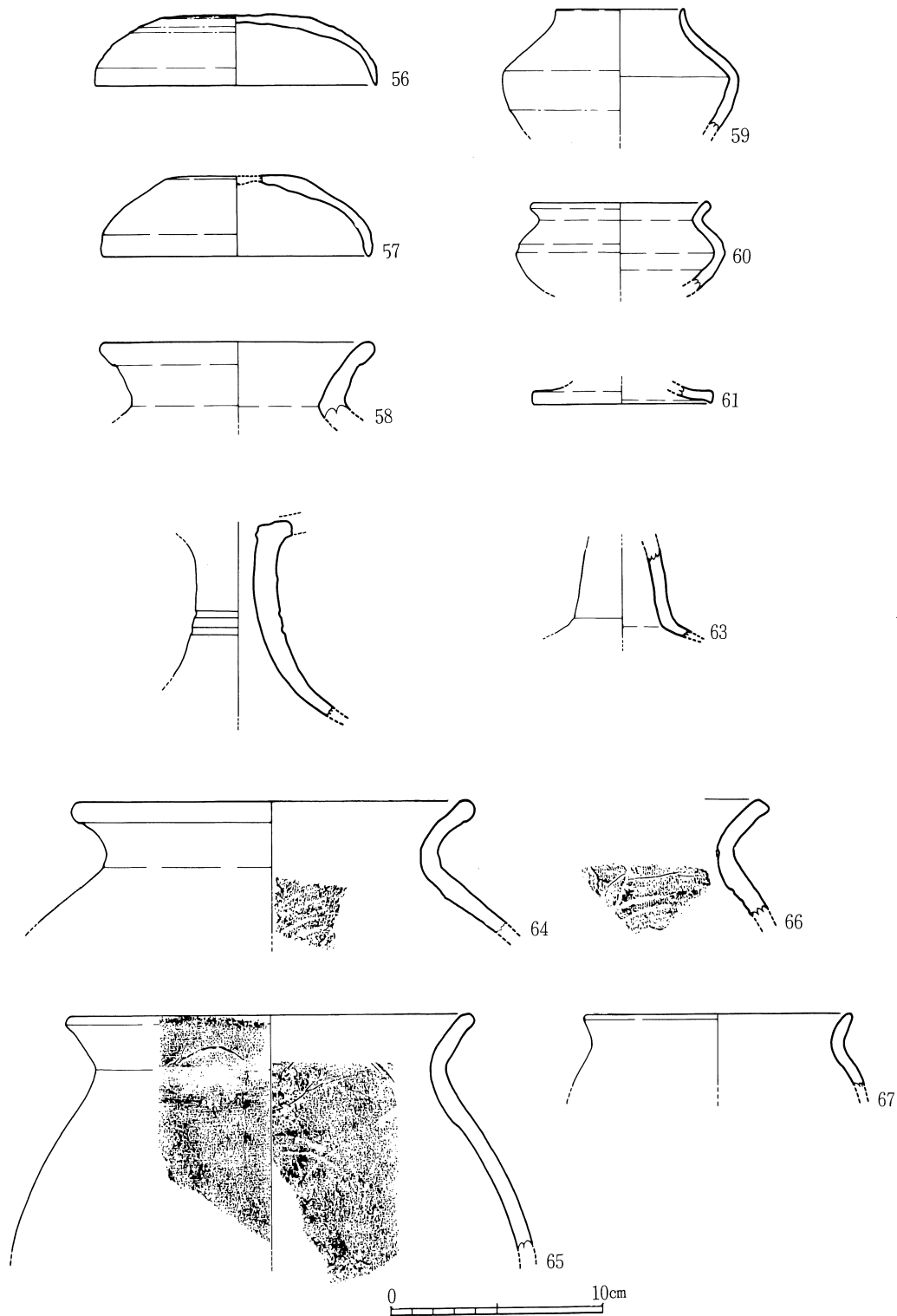
原口径12.4cmを測る。59、60は須恵器埴で、59は体部下半に回転ヘラケズリがみられる。60は口縁部が、「く」の字状に外へ折れる。61~63は高坏である。61は須恵器で、底部端部が下方へつまみ出される。62は赤焼土器高坏脚部で、中程に2条の沈線が施される。63は土師器高坏脚部である。64~66は甕で、赤焼土器とされるものである。64は口縁端部が丸味をもち、内面に同心円タタキを有する。65は口縁が、「く」の字に折れ、端部は丸味をもたない。内面は同心円タタキの後ナデを施す。66も65と同様である。67は土師器甕で口縁がゆるやかに外反する。内外ナデ調整である。68は土師器甕で把手が付く、復原口径は約27cmで、内面にタタキがみられる。69はかまどである。破片のため全体の復原はむつかしいが、底径50cm前後になるものと思われる。また焚口部に沿い庇がついていたようである。内面には同心タタキもみられる。



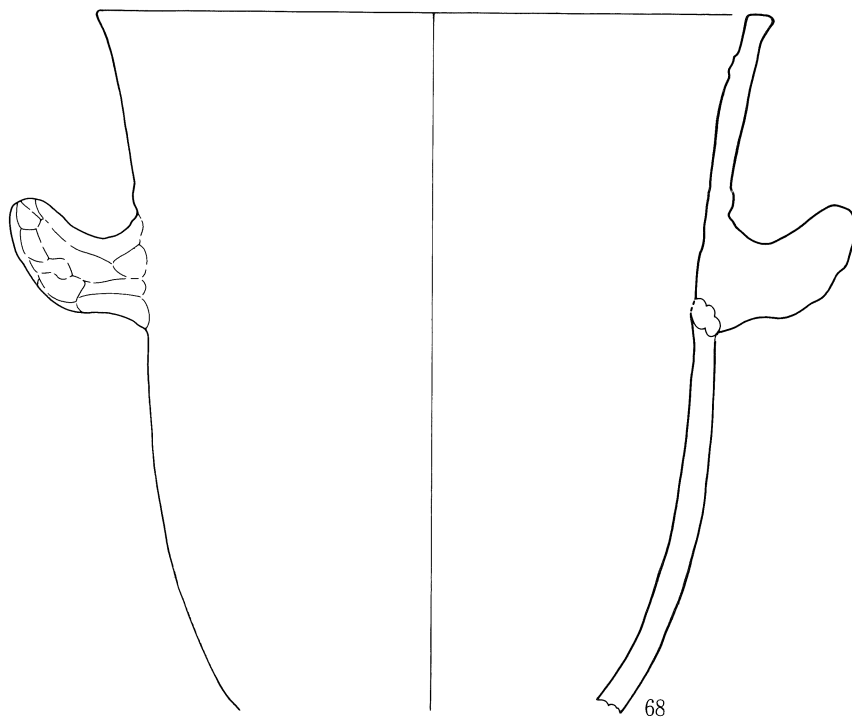
第192図 3号住居跡カマド実測図



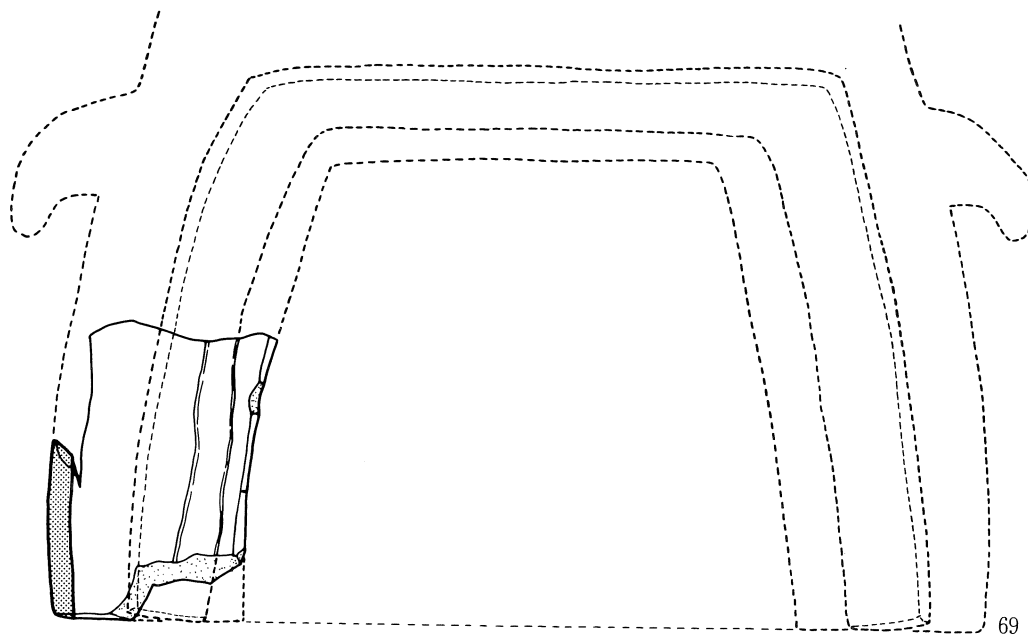
第193図 3号住居跡出土遺物実測図(1)



第194図 3号住居跡出土遺物実測図(2)



0 10cm



0 20cm

第195图 3号住居跡出土遺物実測図(3)

4号住居跡

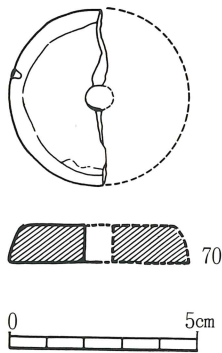
遺構（第189図）4号住居跡は2号住居跡により切られる。残存した部分も削平が著しく、壁の立ち上がりが確認できない部分もある。主柱穴はP6～P9の四本柱で、P7は2号住居跡のカマド部分の下にあたる。主柱穴間の長さは、P6・P7間約3.4m、P7・P8間約3.4m、P8・P9間約3.3m、P9・P6間約3.2mと、2号住居跡とほぼ同様であることから、4号住居跡は一辺5.5×6.5mほどの規模を有するものと推定される。

カマドの痕跡は全く認められない。住居跡の壁がわずかに残る北東側にカマドが位置すれば下部構造の土壌だけでも検出されるはずである。しかし、それが全く認められないことからカマドは削平が著しい北西側に但置したものと思われる。

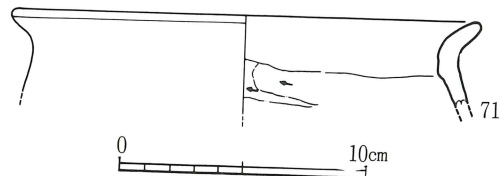
遺物（第196・197図）石製品、須恵器、土師器などがあるが図示できるものは少ない。

70は滑石製紡錘車である。P8から出土したもので、ほぼ半分に割れている。径約5cm、厚さ約1cmで、中央に径約0.7cmの孔をあける。

71は土師器甕である。胴部があまりふくらまない長胴タイプと思われ、内面ヘラケズリがみられる。



第196図 4号住居跡出土遺物実測図(1)



第197図 4号住居跡出土遺物実測図(2)

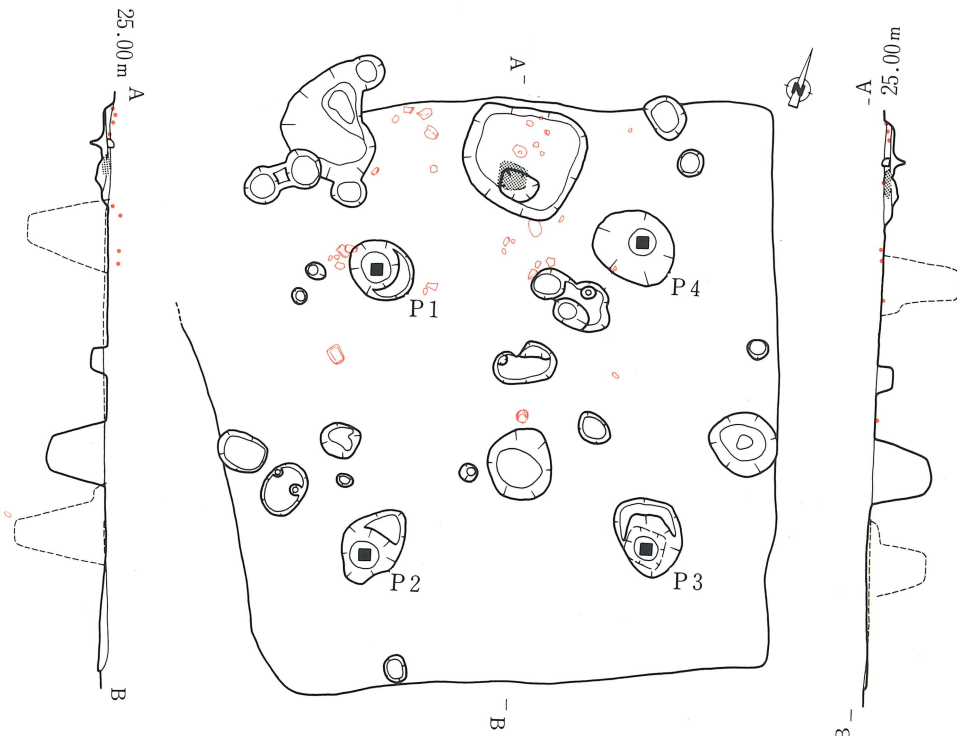
5号住居跡

遺構（第189図）5号住居跡は3号住居跡により切られる。遺構が調査区外に及ぶため全体の規模や主柱穴などについては不明である。また、周溝はみられない。

遺物 遺物は出土しなかった。

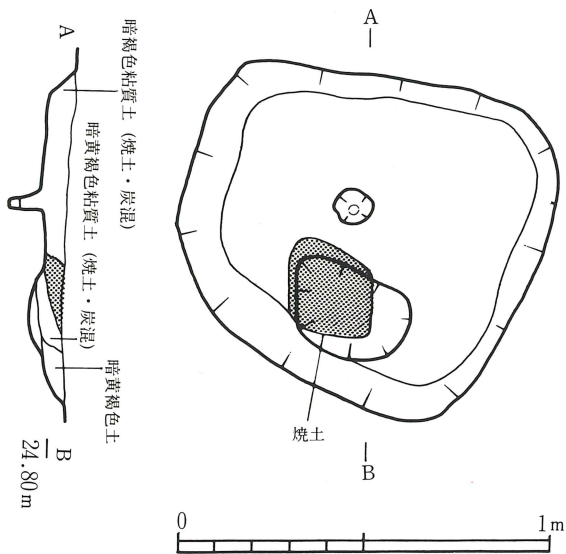
6号住居跡

遺構（第198・199図）6号住居跡は削平が著しく、壁の立ち上がりはほとんど残存しない。しかし、床面の広がりから住居跡の規模はほぼ断定できる。また、1号建物と2号建物が重複

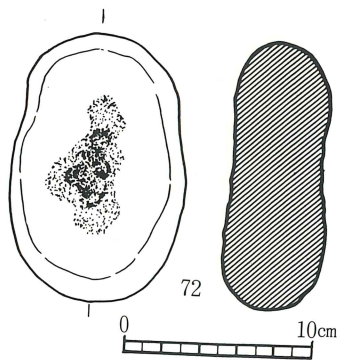


住居跡の柱穴は主柱穴■のみ投影

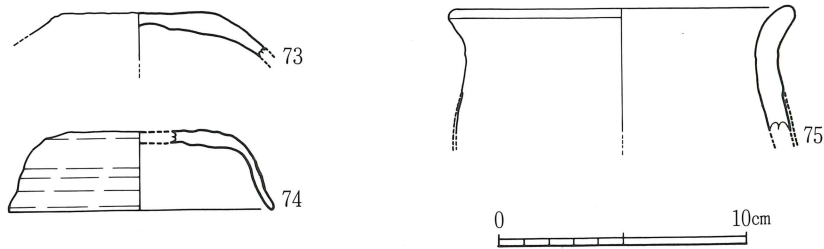
第198図 6号住居跡実測図



第199図 6号住居跡カマド実測図



第200図 6号住居跡出土遺物実測図(1)



第201図 6号住居跡出土遺物実測図(2)

するが、2号建物の柱穴は明らかに6号住居跡より新しく、1号建物との先後関係については層位的、面的にも確認できなかった。住居跡は一辺約5mの方形で、床面積は約25m²である。主柱穴はP1～P4の4本柱で、柱穴間の長さは、P1・P2間約2.2m、P2・P3間約2.3m、P3・P4間約2.3m、P4・P1間約2.1mである。周溝はみられない。

カマドは北壁中央付近にあるが、削平のため下部構造の約90×100cmの浅い土坑が残在するのみである。焚口部付近には硬い焼土塊がある。

遺物(第200・201図)石器、須恵器、土師器がある。

石器は72の凹石である。両面に使用痕がみられる。これは縄文時代の所産である可能性もある。

73、74は須恵器である。73は坏蓋で、天井部はヘラ切りである。74は埴蓋で、復原口径約10.6cmを測る。

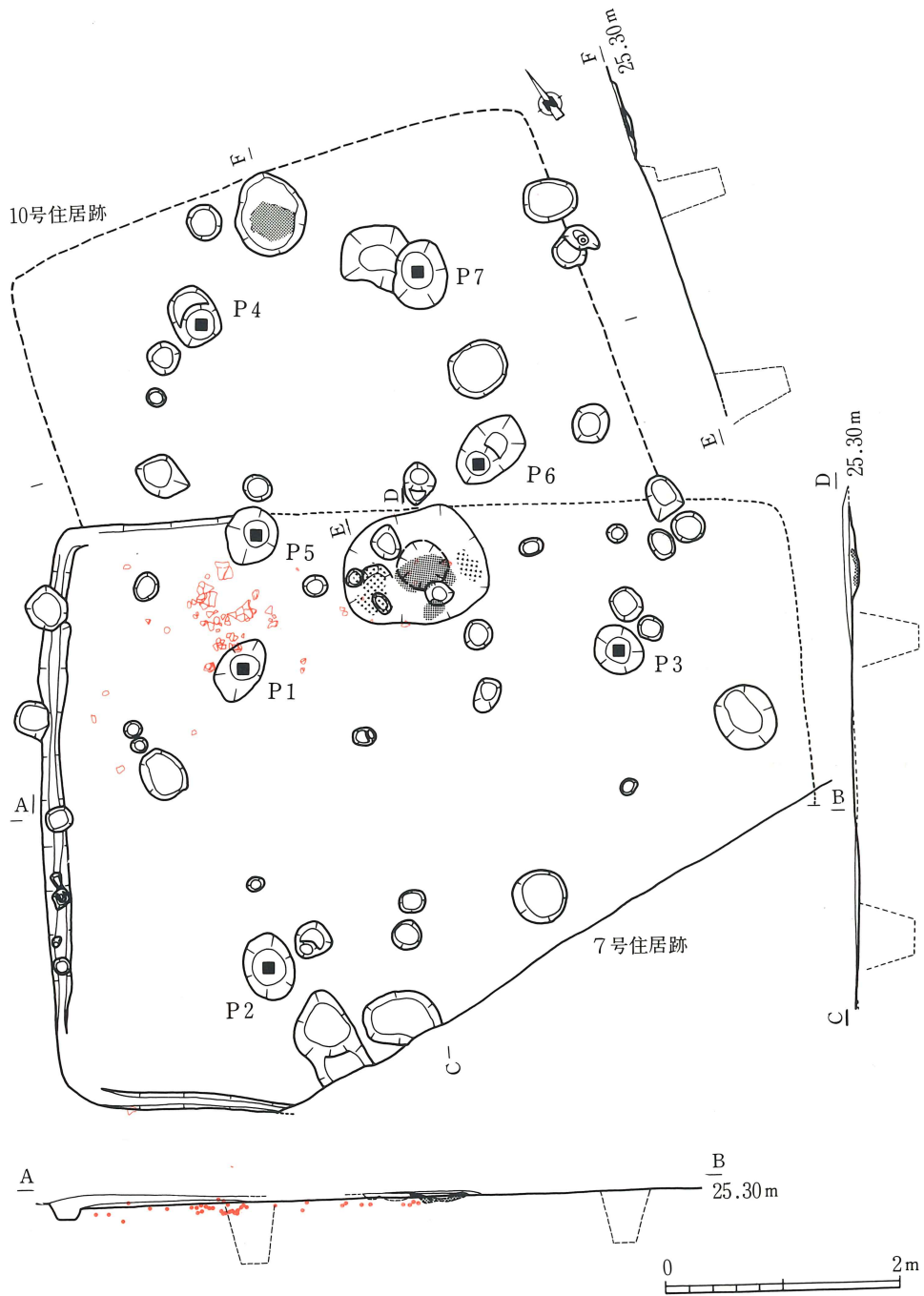
75は土師器甕である。口縁はゆるやかに外反するもので、胴部はあまり張らない。

7号住居跡

遺構(第202・203図)10号住居跡と重複する。削平が著しく(10号住居跡は床面も削平され、主柱穴とカマドの下部構造のみ残存)先後関係の断定はむづかしいが、7号住居跡が10号住居跡に後出する可能性が強い。

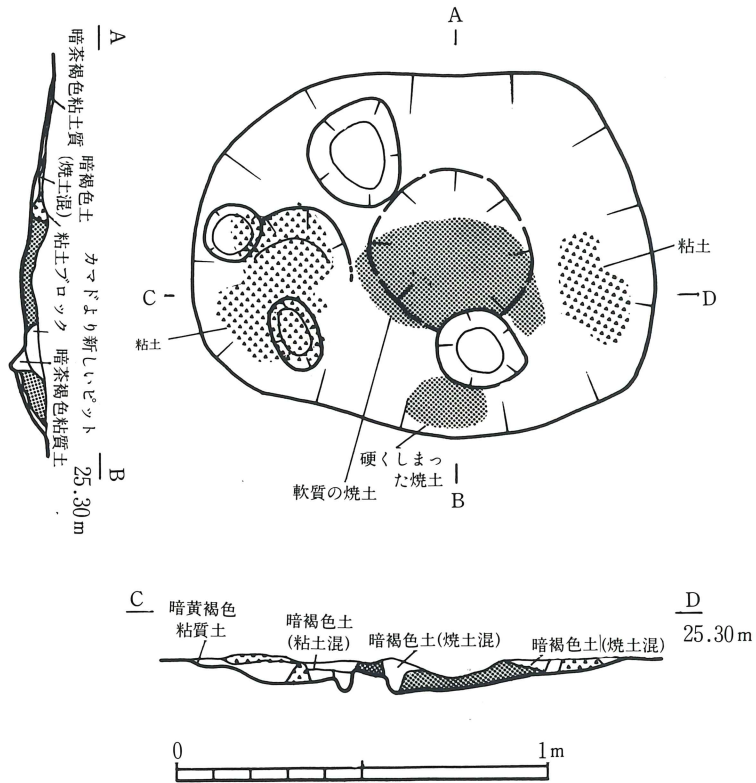
7号住居跡は長方形を呈し、一辺約4.8×6.3m、床面積約30m²である。主柱穴は4本柱と思われるが、1本は調査区外である。柱穴間の長さはP1・P2間約2.4m、P1・P3間約3.6mである。周溝は北西側と南西側にみられる。

カマドは住居跡長辺である北東壁中央付近に位置するが、下部構造の1×1.2mの浅い土壇が残存するのみである。焚口部付近には硬く焼けしまった焼土が、また中央付近にも軟質の焼土がみられる。焼土の両脇には粘土が残存しているが、これはカマドそで部の痕跡である可能性が強い。



住居跡の柱穴は主柱穴■のみ投影

第202図 7・10号住居跡実測図



第203図 7号住居跡カマド実測図

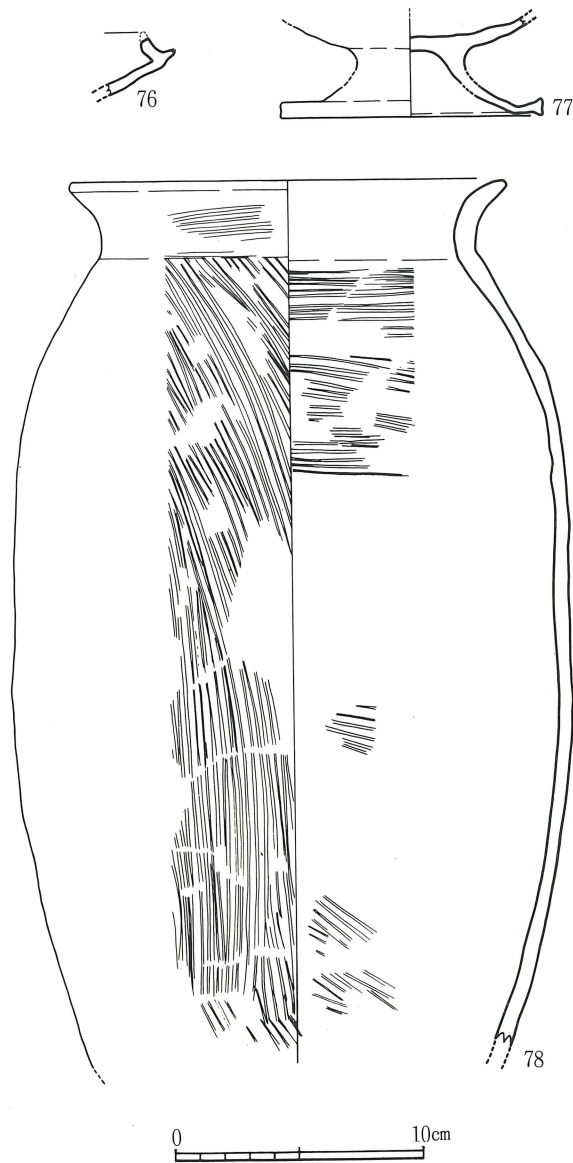
遺物（第204図）削平のため住居跡の残存状態が悪く、遺物の量も少ない。そのなかで、土師器、須恵器などが出土した。

76、77は須恵器である。

76は坏身で、やや厚目の立ち上がり部が内傾気味に立つ。

77は短脚の高坏脚部である。脚はすそに向いのびるが、途中でいったん折れる形態をとる。復原底径 10.6cm で、端部は上下につまみ出される。

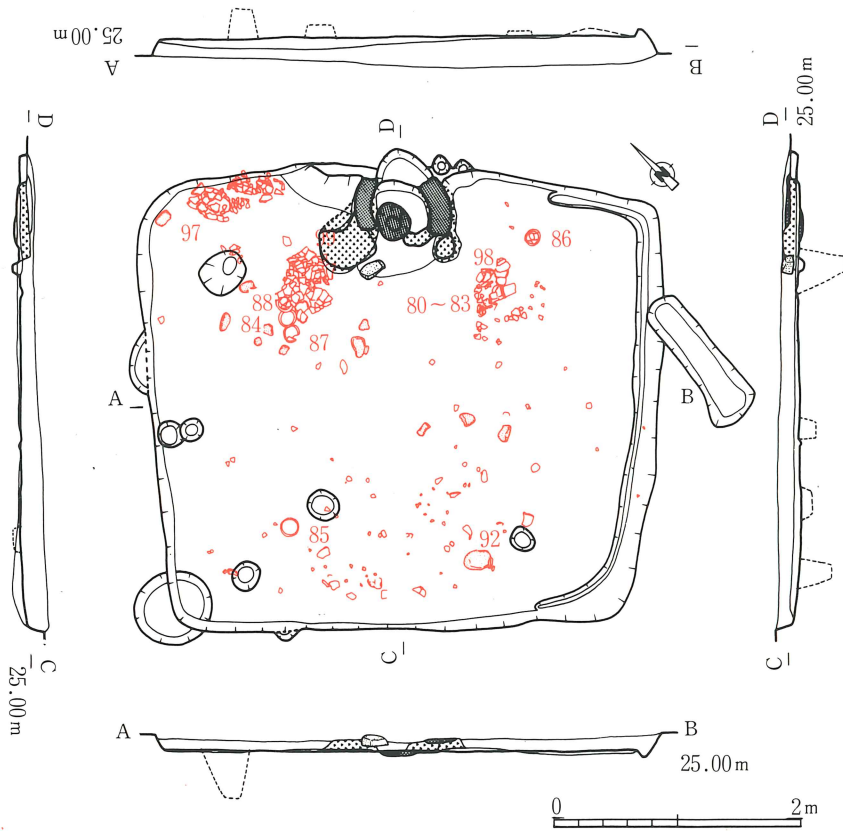
78は土師器甕である。住居跡北西隅近くの床面に破片がまとまっていたが、底部などを欠き完形品にはならない。長胴のタイプで口縁はゆるやかに外反しながら外へ折れる。口径は17.2 cm を測る。



第204図 7号住居跡出土遺物実測図

8号住居跡

遺構（第205・206図）一辺約4×3.5mのやや台形気味の方形住居で、床面積は約14m²である。深さは約25cmを測り、大坪遺跡のなかでもっとも残存状態がよい。住居内には柱穴がいくつかあるが、他の住居跡とは異なり4本柱の位置に柱が検出されなかった。住居跡西北壁に沿い、やや深い柱穴がみられるが、本住居跡の支柱穴とは考えにくい。周溝は全周せず、東



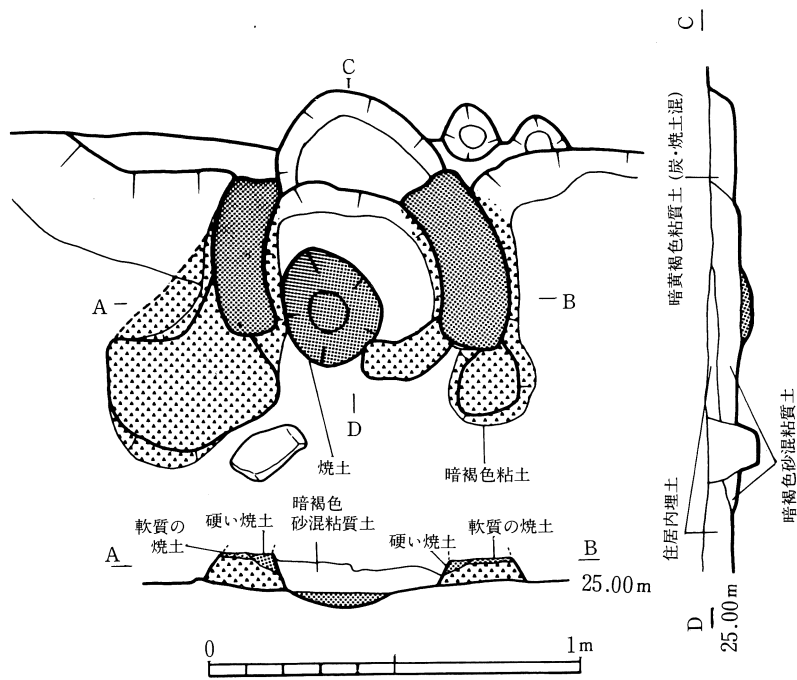
第205図 8号住居跡実測図

南側および北東側、南西側の一部にみられるのみである。幅15~30cm、深さ5cmを測る。

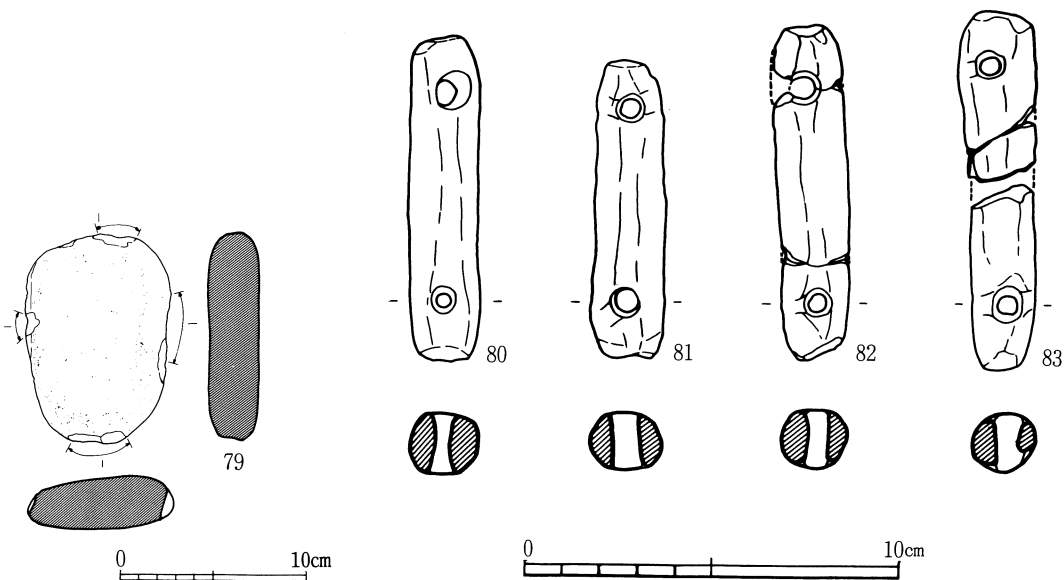
カマドは北東壁中央付近に位置する。比較的残存状態がよく、そで部などの構造も残る。平面形は「八」字形を呈し、長さ約80cm、焚口部幅約45cm、奥壁部幅約35cmを測る。焚口部付近に、焼土塊がみられる。幅20~25cmのそで部は暗褐色粘土層で築かれており、基底部から5~10cmの高さ残存する。また、カマドの背後壁はカマド構築時に20cm程掘り込まれており、煙道施設に関係するものと思われる。

遺物(第207~211図) 8号住居跡には遺物が良好な状態で残されており、床面から完形の須恵器坏身5(84~88)、土圧でつぶれた土師器甕3(97~99)、棒状の土錘4本(80~83)などが出土した。このほか流れ込みの状態、石器、須恵器、土師器などがみられる。

79は石錘と思われるもので、約10×8cmを測る。4カ所に縄かけ用のかき調整が両面から施される。

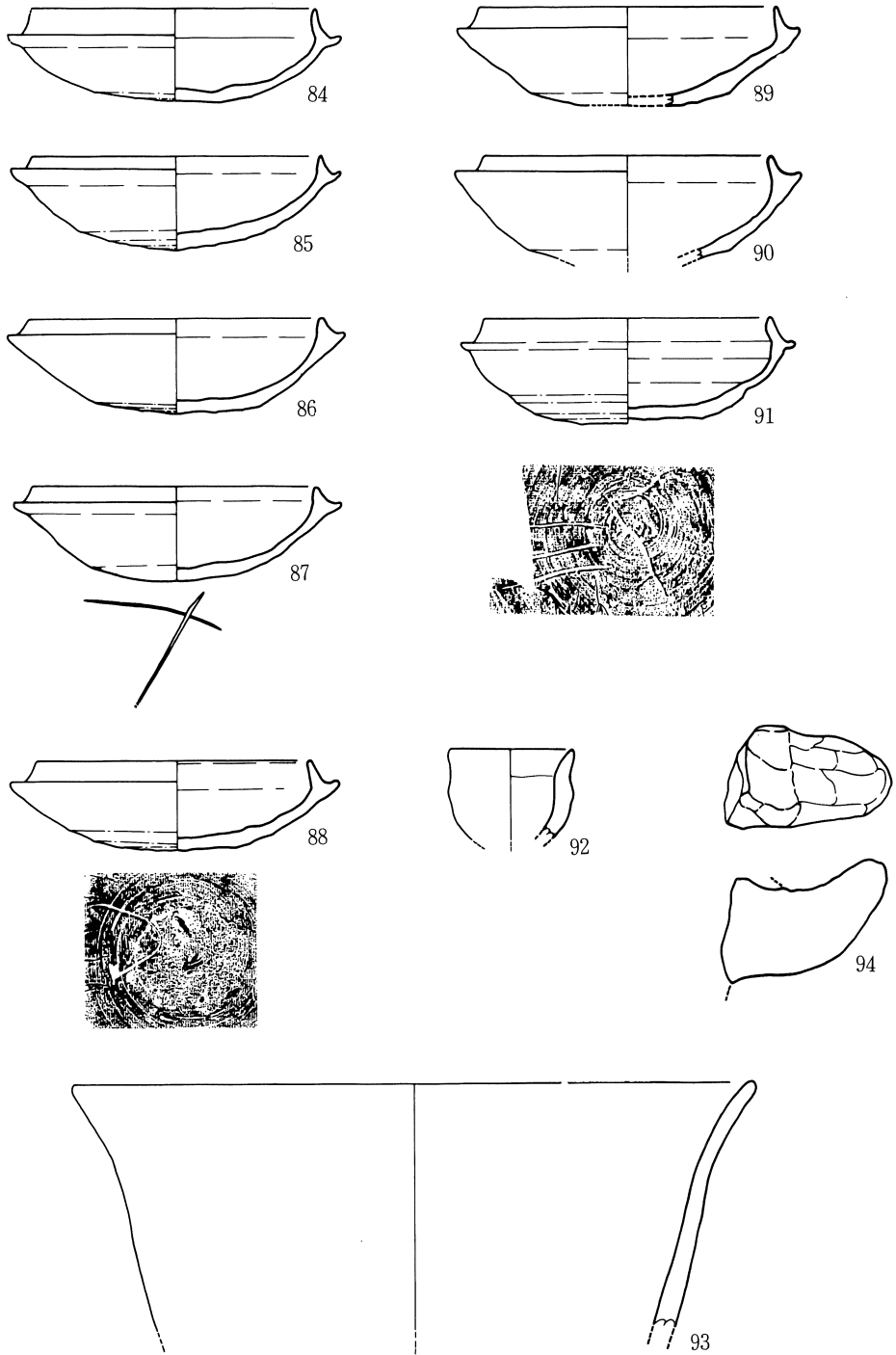


第206図 8号住居跡カマド実測図

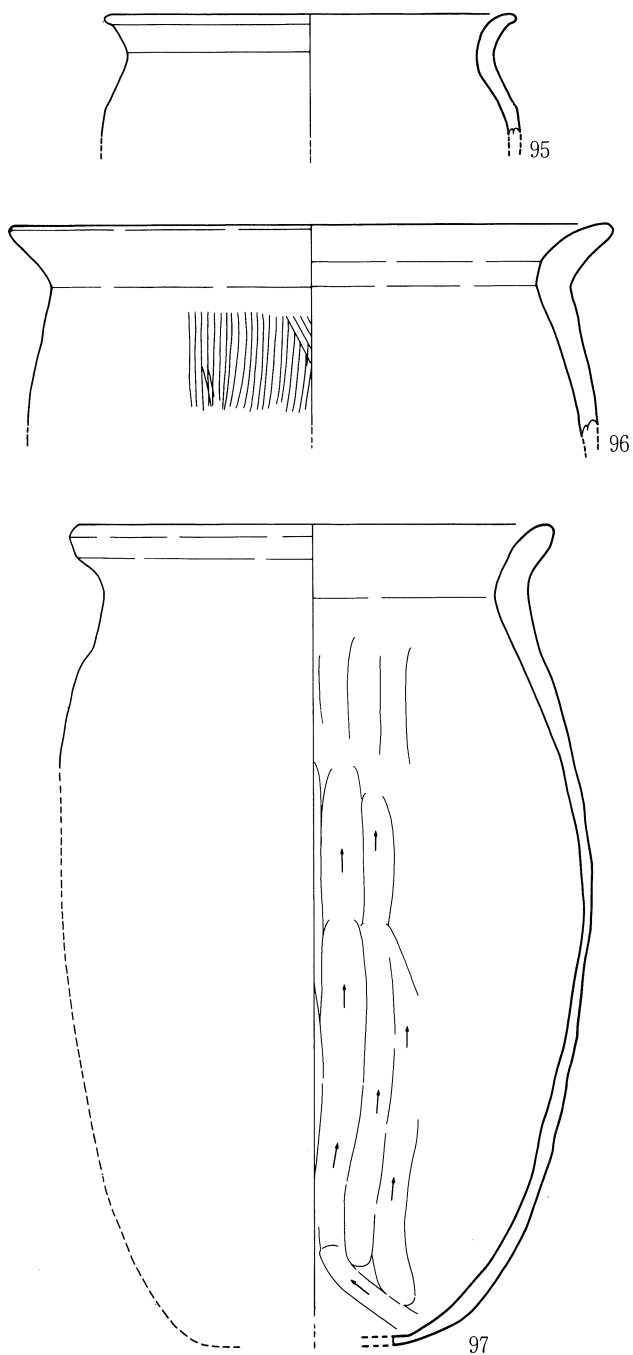


第207図 8号住居跡出土遺物実測図(1)

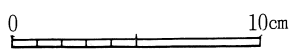
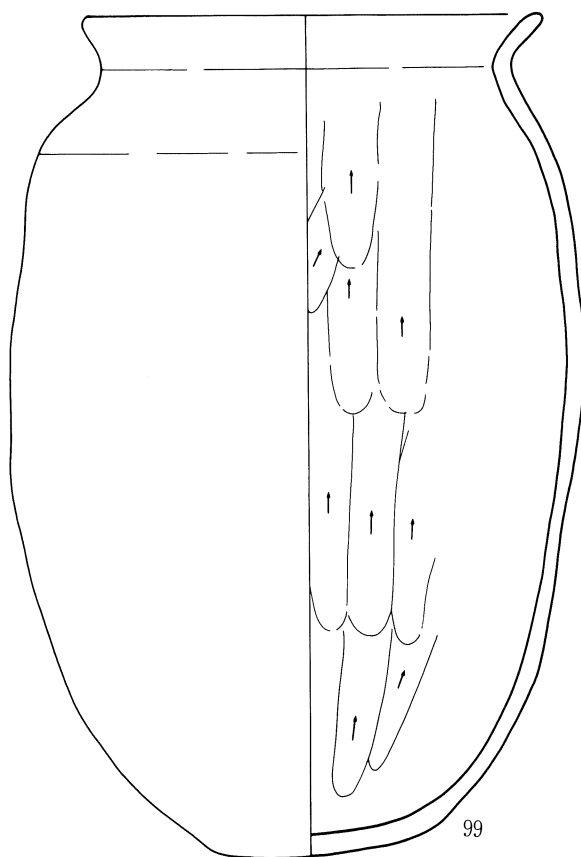
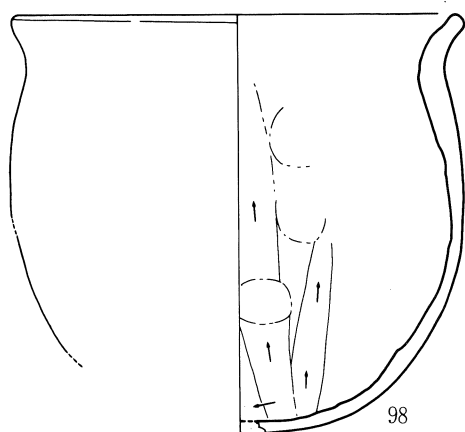
第208図 8号住居跡出土遺物実測図(2)



第209図 8号住居跡出土遺物実測図(3)



第210图 8号住居跡出土遺物実測図(4)



第211図 8号住居跡出土遺物実測図(3)

80~83は棒状の土錘で長さ8~9cm、径約2cmを測る。両端に孔を施すが、紐などをかけた痕跡であろうか、孔周辺が磨り減っているものもある。

84~91は須恵器坏身である。うち84~88は床面から出土したもので、いずれもほぼ完形である。口径は11.5~12.4cmを測る。また、87、88の外底面にはヘラ記号がみられる。89~91は流れ込みの状態出土したもので、口径は12~12.4cmを測る。91の外底面にもヘラ記号がみられる。

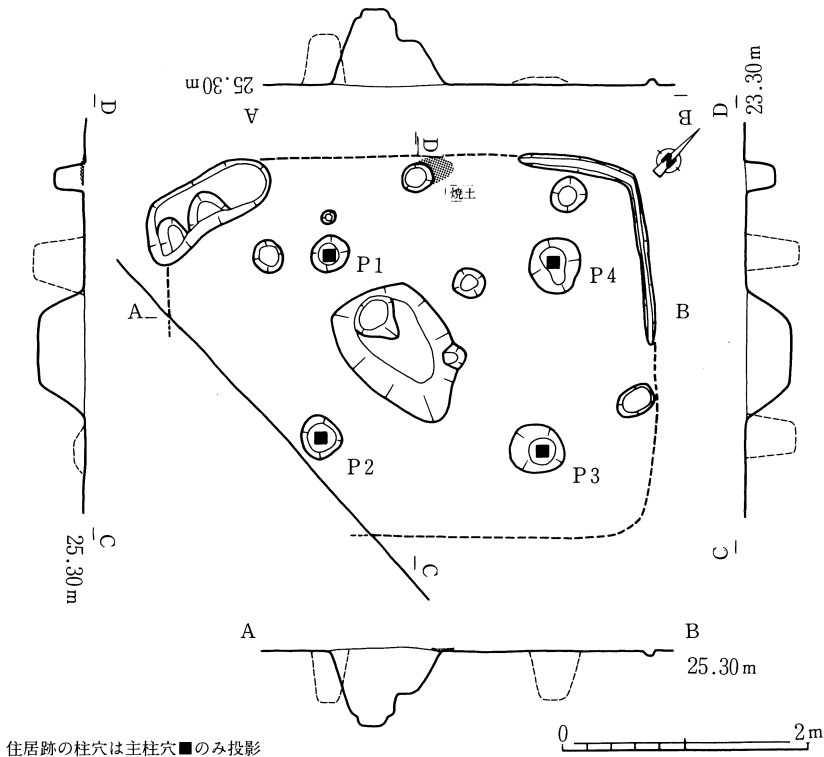
92は土師器小形品で、復原口径5.1cmを測る。

93、94は土師器甑である。93は復原口径約28cmを測る。また、94は把手部である。

95~99は土師器甕で、97~99は床面から出土した。95は復原口径約17cmで、口縁はゆるやかに外反する。96は厚い口縁部が「く」の字状に外へ折れる。95、96とも内面ヘラケズリであろう。97は口径約19cm、高さ約33cmで、口縁部は厚く、長胴の形態をとる。内面はヘラケズリが施される。98は口径約18cm、高さ約17cmで、胴部は口径とほぼ同じで球状を呈する。99は口径約18cm、高さ約34cmの長胴タイプである。内面はヘラケズリが施される。

9号住居跡

遺構(第212図)削平のため周溝の一部と支柱穴、カマドの痕跡がみられるのみである。柱



第212図 9号住居跡実測図

穴はP1～P4の4本柱で、P1・P2間約1.4m、P2・P3間1.7m、P3・P4間1.5m、P4・P1間約1.8mを測る。これらから一辺約3×4m、床面積約12m²の住居跡規模を復原することができる。カマドは北西壁中央付近に構築されていたと思われる、わずかに焼土が残る。周溝は幅約10cm、深さ約5cmで北隅のみにみられる。

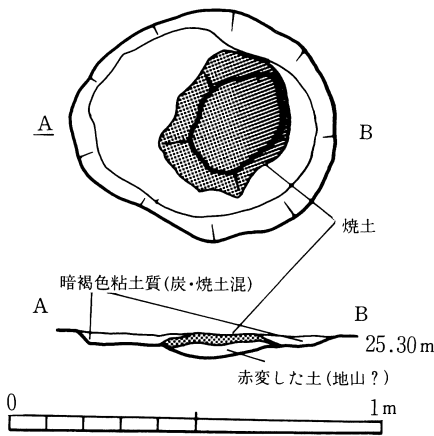
遺物 図示できる遺物はない。

10号住居跡（第42図）

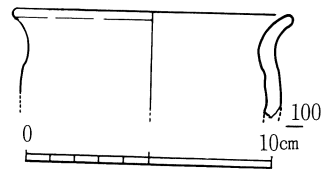
遺構（第202・213図）7号住居跡と重複する。削平が著しく先後関係は明確ではないが、7号住居跡に先行する可能性をもつ。削平され主柱穴とカマドの下部構造が残存するのみであるが、一辺約4.5mの方形住居跡であると推定される。主柱穴はP4～P7の4本柱で、柱穴間の長さは、P4・P5間約1.8m、P5・P6間約2m、P6、P7間約1.7m、P7・P4間約2mである。柱穴の深さは50～60cmを測る。また、周溝はみられない。

カマドは北東壁中央付近にあったと思われる、60×70cmの浅い土坑と焼土がその痕跡として残る。

遺物（第214図）100は復原口径11cmの土師器甕である。



第213図 10号住居跡カマド実測図



第214図 10号住居跡出土遺物実測図

5号土坑

5号土坑は6号住居跡の南側に位置し、6号土坑とはほぼ接する。

土坑は不正円形を呈し、縄文時代の所産と考えられる3号土坑を切る。規模は長径約2.8m、短径約2.6mで、深さ約10cmを測る。土坑内には柱穴がいくつかみられるが、本土坑に伴うものであるかは明確でない。埋土は6号土坑同様、黒色土が流入していた。

出土遺物は土師器高坏、甕などある。

第215図101は高坏脚部で、内面にはヘラケズリがみられる。

第215図102は復原口径約18cmの甕で、口縁がわずかに外反する。また調整は内外面ともナデが施される。

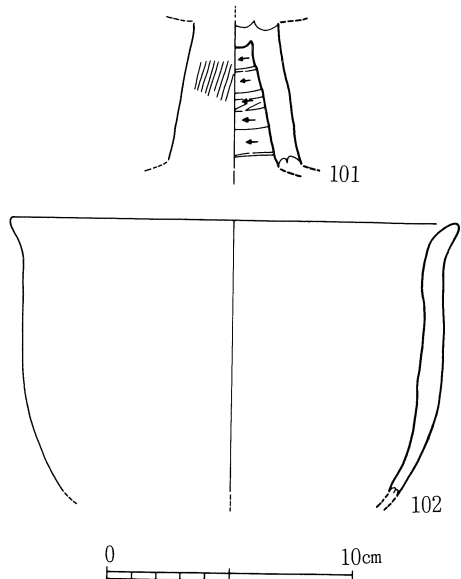
6号土坑 (第216図)

削平のため残存状態が悪く、一部不明な部分もある。

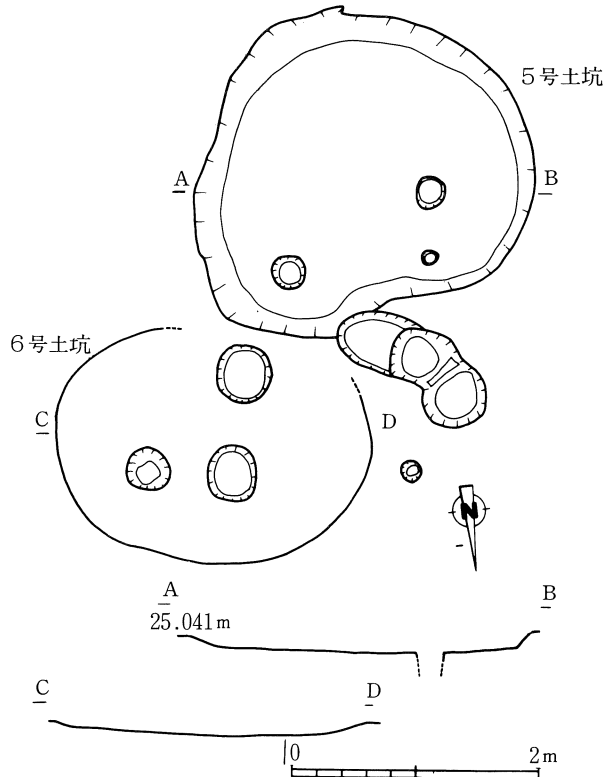
形状は楕円形を呈し、長径約2.5m、短径約2mを測る。深さは最深部で約10cmで、断面が皿状を呈する。土坑内には柱穴がいくつかあるが、うちP1は2号建物の柱穴で、時期的には明らかに後出する。そのほかの柱穴についても、本土坑に伴うものであるか不明である。また埋土は5号土坑同様黒色土が流入していた。

土坑内の遺物は非常にわずかであるが、須恵器、土師器などが出土した。このうち実測可能なものは103のみである。

第217図103は土師器甕である。復原口径約20.2cmを測り、口縁がゆ



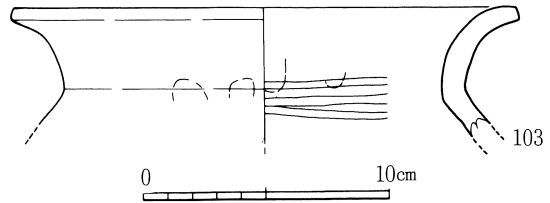
第215図 5号土坑出土遺物実測図



第216図 5・6号土坑実測図

るやかに大きく外反する。また、口縁端部は角ばる。調整は外面にナデが、そして内面にハケがみられる。

このほか、天井部に回転ヘラケズリの施される須恵器坏蓋の破片などもみられる。



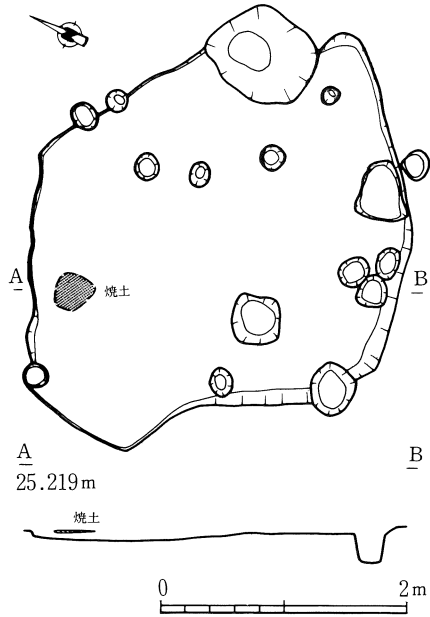
第217図 6号土坑出土遺物実測図

16号土坑 (第218図)

16号土坑は6号住居跡の北側に位置する。

形状は不正方形で、1辺約3×3m、深さ約10cmを測る。また、遺構内には多くの柱穴があるが、本遺構に伴うものであるかは不明である。このほか焼土が1カ所みられる。約30×30cmで、厚さは3～4cmと薄く、床面から約5cmほど浮いている。

遺物については、土坑内から目立ったものは出土していない。土坑の時期は、遺物が出土せず明確でないが、埋土などの状況から古墳時代に位置づけられるものと思われる。



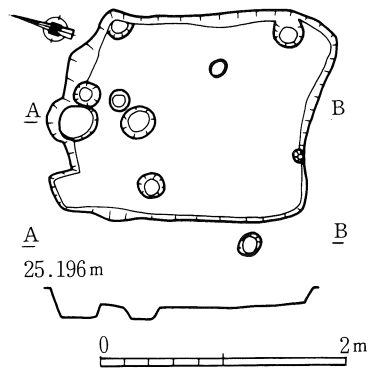
第218図 16号土坑実測図

17号土坑 (第219図)

17号土坑は調査区の東北隅に位置する。すなわち、自然堤防の末端にあたる。

形状は長方形を呈する。規模は約2×1.6mで、深さは約10cmである。また、土坑内には柱穴がいくつかみられるが、本土坑に伴うものであるかは明確でない。

遺物は目立ったものがない。しかし、埋土の状況などから古墳時代に位置づけられるものと思われる。



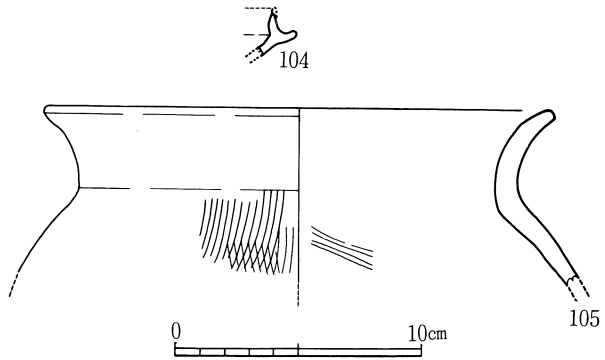
第219図 17号土坑実測図

18号土坑（第220図）

18号土坑は4号土坑と重複するもので、4号土坑を切る。

形状は不定形を呈し、規模は約3×1.4m、深さ約20cmである。

遺物は少数であるが、須恵器、土師器などが出土した。104は須恵器坏身で、小破片のため口径の復原はできなかった。105は土師器甕で、内外面にハケ目がみられる。

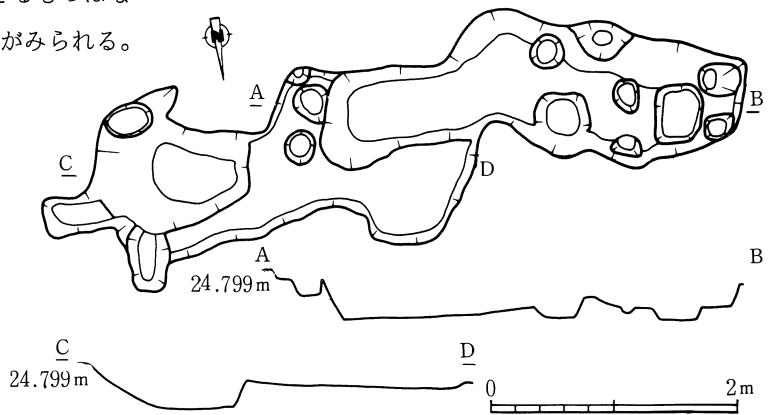


第220図 18号土坑出土遺物実測図

19号土坑（第221図）

19号土坑は18号土坑のすぐ東側に位置する。横長の不定形土坑が二つ重複した可能性が強く各々の土坑は約3×1mほどである。

遺物の出土は非常に少なく、いずれも小破片である。図示できるものはないが、須恵器や土師器などがみられる。



第221図 19号土坑実測図

5) 歴史時代

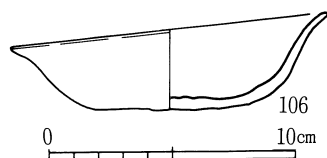
歴史時代に位置づけられるものとして、掘立柱建物5棟、土坑3基などが検出された。掘立柱建物のうち1棟は2×2間の総柱で、倉庫と考えられるものである。また、土坑はいずれも墓が想定される。

遺物については、その出土数が非常に少数で図示できるものはわずかしかない。

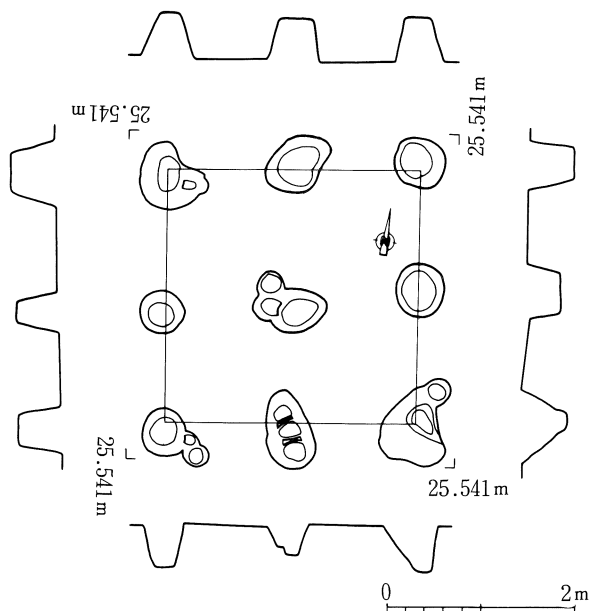
1号建物 (第223図)

1号建物は2×2間の総柱で、主軸をN10°Wにとる。柱間距離は北側柱列で東側から1.3m+1.4m、西側柱列で北側から1.6m+1.2mである。柱穴はいずれも径約50cmと大形で、深さは30~50cmを測る。東南隅柱穴が6号住居跡と重複するが、削平が著しく面的、層位的な前後関係はつかめなかった。

遺物は東南隅柱穴より106の土師器坏が出土した。底部ヘラ切りで、口縁がゆるやかに外反する。



第222図 1号建物出土遺物実測図

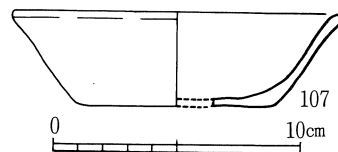


第223図 1号建物実測図

2号建物 (第225)

2号建物は1号建物の東南側に位置する。規模は2×4間で、主軸をN20°Wにとる。柱穴は1号建物同様大形で、深さは25~55cmを測る。柱間距離は北側柱列で東側から2m+2m+2.1m+1.8m、西側柱列で北側から2.2m+2.2mである。

柱穴内からの出土遺物は小破片が多く、古墳時代に位置づけられる須恵器、土師器なども混じり込みとしてみられた。そのなかで、北側柱列の西から2番目柱穴から出土した第224図107は、土師器坏で、底部がヘラ切りである。口径は13.2cmを測り、口縁部がゆるやかに外反する。

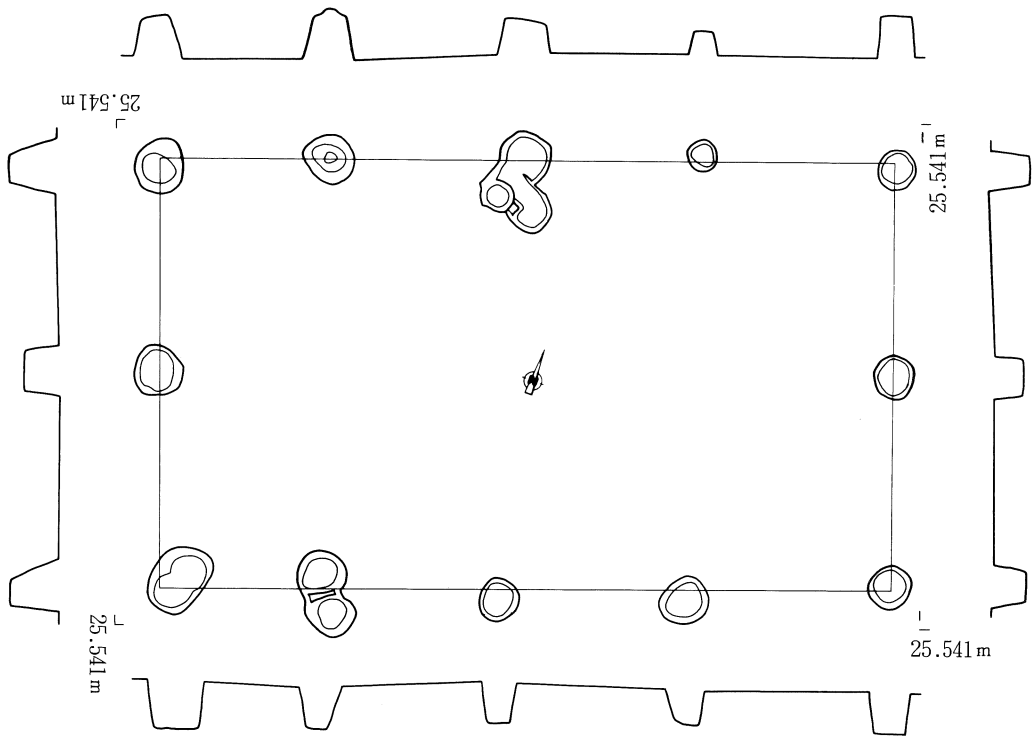


第224図 2号建物出土遺物実測図

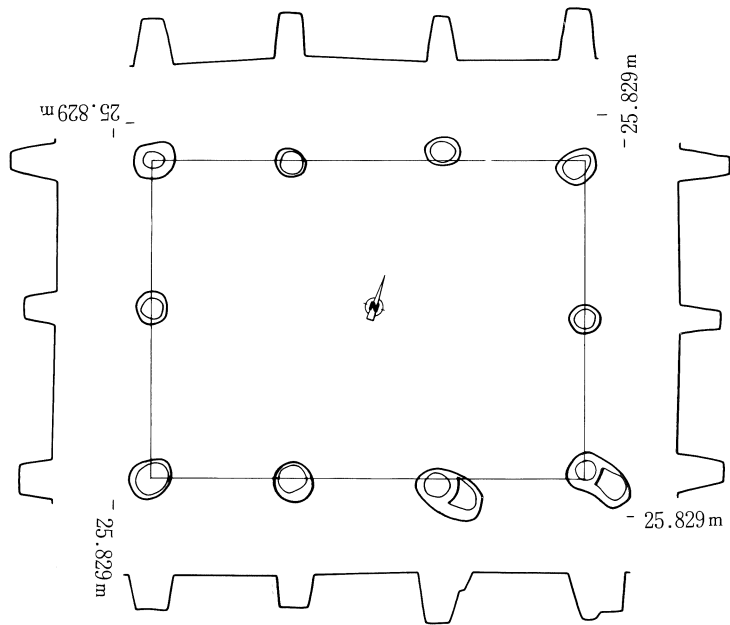
3号建物 (第226図)

3号建物は2×3間で、主軸をN18°Wにとる。柱間距離は北側柱列で東側から1.5m+1.6m+1.5m、西側柱列で北側から1.6m+1.8mである。柱穴は1、2号建物に比べるとやや小さい傾向にある。

柱穴内からの出土遺物は小破片が多く、図示できるものはない。時期的には古墳時代に位置づけられるものが多く、明らかにそれ以降のものはほとんど認められないようである。しかし古墳時代の建物と断定するには躊躇され、1、2号建物と同時期あるいはそれ以降の歴史時代



第225图 2号建物实测图

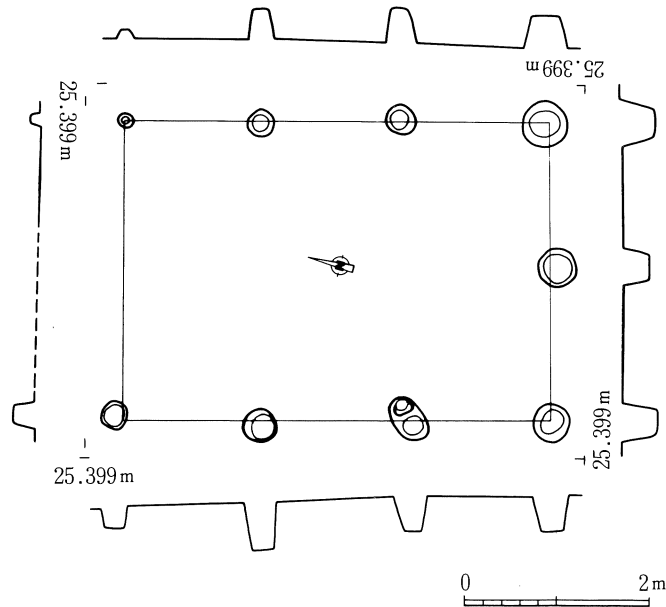


第226图 3号建物实测图

の所産と考えておく。

4号建物（第227図）

4号建物は2×3間の規模で、主軸をN15°Wにとる。柱間距離は東側柱列の北側から1.4m+1.4m+1.6m、南側柱列の東側から1.5m+1.6mである。柱穴は3号建物同様、1、2号建物に比べ小さい。出土遺物については3号建物と同じ状況で、4号建物も歴史時代の所産と考える。

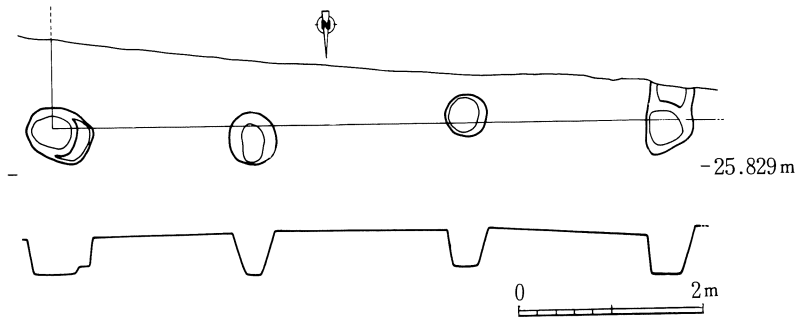


第227図 4号建物実測図

5号建物（第228図）

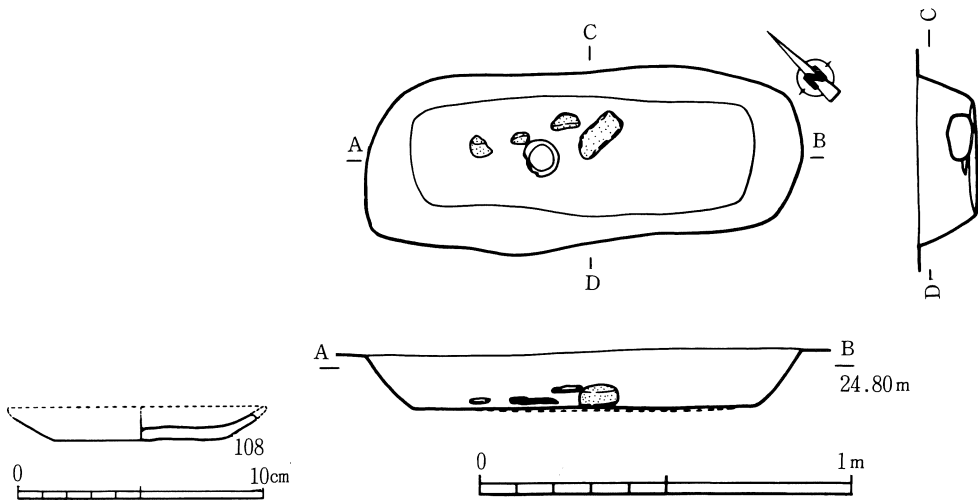
5号建物は大半が調査区外にあるため、その全容は不明である。しかし、東西方向に主軸をとるらしく、その方向はN2°Wである。柱穴の大きさが1、2号建物同様比較的大きいことから、規模的には2号建物と同じ2×4間の建物が想定される。柱間距離は北側柱列東側から2.1m+2.3m+2.2mである。また、柱穴の深さは40～50cmを測る。

柱穴内からは時期の決め手となるような遺物は出土していないが、柱穴の大きさや柱間距離などから、2号建物と類似性がうかがえ、時期的にも同様な時期の所産と考えさしつかえなからう。



第228図 5号建物実測図

1号土坑は土壙墓であると考えられる。その規模は長さ2.3m、幅0.9m、深さ0.3cmで、南北方向に主軸をとる。土壙中央付近から完形の土師質土器杯が1個体出土したが、床面から浮いた状況であった。第229図108は出土した土師質土器小皿で、口径約10.5cmを測る。器面の荒れ、剥落が著しく、底部切り離し等は不明である。



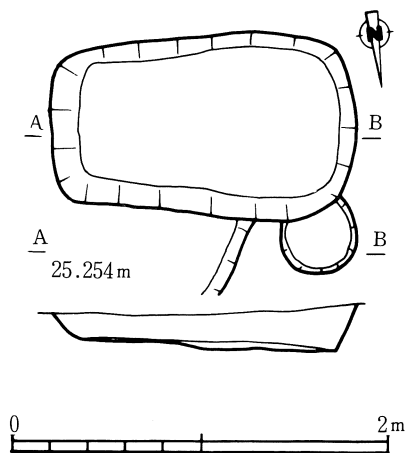
第229図 1号土坑出土遺物実測図

第230図 1号土坑実測図

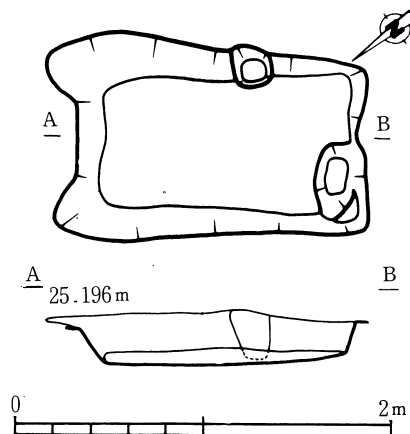
9号土坑は長さ1.6m、幅1m、深さ0.2mの長方形を呈する。時期決定の遺物を欠くが、埋土から古墳時代以降に位置づけられ、形態的には中世の土壙墓の可能性をもつ。

10号土坑 (第232図)

10号土坑は長さ1.5m、幅1m、深さ0.3mの長方形である。9号土坑同様時期決定の遺物を欠くが、その形態などから中世土墳墓の可能性をもつ。



第231図 9号土坑実測図



第232図 10号土坑実測図

3. まとめ

1) 縄文時代

縄文時代の遺構としたものはいずれも土坑である。その性格については明らかにしえないものが多いが、形態的には(1)長楕円形基調のもの(3、7、8、14、15号土坑)、(2)円形のもの(4号土坑)、(3)不定形のもの(2、11~13号土坑)などに分類することができる。遺物が出土した遺構が少なく時期を明確にできないものも多いが、そのうちいくつかは確実に縄文晩期に位置づけられる。とくに、4号土坑からは土器がややまとまって出土しており、貯蔵穴などの用途が考えられる。

4号土坑出土土器は深鉢、浅鉢がある。深鉢は口縁文様帯の拡張が著しく、外面の沈線も細く間隔があく。また、底部もやや厚みを持ち、円盤貼り付け底部の形態へちかづいたものである。浅鉢は口縁の立ち上りが鈍く、外面の沈線が明確でない。これまで県北地域において当該期の資料は散発的であるが、資料が豊富な大野川流域の編年観によれば、晩期前半の竹田市石井入口遺跡住居跡出土資料に併行させることができる。このほか、大坪遺跡では古墳時代住居跡などから打製石斧も出土しており、これらについても縄文晩期の所産と考えられる。

2) 古墳時代

古墳時代の遺構としては住居跡と土坑が検出された。調査区が犬丸川左岸にある自然堤防の北端部にあたることから、自然堤防上に展開する集落の末端を調査したことになる。

住居跡群の変遷

まず、須恵器坏を中心に各住居跡の出土土器を概観する。1号住居跡からの出土は少数である。このうち須恵器坏身は1点ではあるが、復原口径13cmを測り、底部に回転ヘラケズリを施す。

2号住居跡からは須恵器坏、土師器甕などが出土した。須恵器坏蓋は完形品がなく復原資料ではあるが、口径13~15.3cmを測り、その平均は14.1cmである。天井部は一部を除き回転ヘラケズリが施される。形態的には全体が扁平な感じのものと、丸味をもつものがある。また、破片資料ではあるが天井部との境に沈線状の軽い段をもち、口縁内面に沈線を施すものもある。坏身は小破片が多いが復原口径12~14.3cmを測り、その平均は13.1cmである。このほか、土師器甕が2個体出土した。外面はいずれも縦ハケであるが、内面はヘラケズリのものと横ハケのものがある。形態的には、やや球形にちかい体部で、胴部中程に最大径をもつ。

3号住居跡は坏蓋が2個体出土した。復原口径12.4、13.2cmで平均12.8cmである。形態的には全体に丸味をもち、うち一つは回転ヘラケズリがみられる。

4、5号住居跡については良好な資料がない。

6号住居跡からは坏蓋片が1点床面から出土した。坏蓋の天井部は平坦でヘラ切りが施される。

7号住居跡は、須恵器坏の良好な資料がない。だが須恵器高坏は、脚部が裾ちかくでいったん折れるという特徴ある形態をもつ。土師器甕は長胴タイプで、外面がハケ、内面がヘラケズリである。

8号住居跡の須恵器坏は坏身のみが出土した。床面より完形品5、埋土より破片3の8個体で、口縁形態には若干の差がみられるが、口径は11.5~12.4cm、平均約12cmとほとんどばらつきがない。底部は回転ヘラケズリを施すものが多い。土師器甕はふたつの形態がある。ひとつは小形のもので、胴部が球形を呈する。他は大形品で、胴部が長胴を呈する。外面はナデで、内面はヘラケズリが施される。

9、10号については良好な資料がない。

以上、住居跡出土土器群を概観したが、これらは小田富士雄氏編年のⅢB~Ⅳ式に相当するものと思われ、坏を指標にすれば、坏の天井部と底部に回転ヘラケズリが施される時期(1期)と回転ヘラケズリを施さない時期(2期)に区分できる。

1期の住居跡は1、2、3、8号住居跡である。これらは、須恵器坏などの形態から言えば同様な特徴を有し、大差は認められない。しかし、口径などからあえて言えば、坏蓋、坏身の平均が各々14.1cm、13.1cmの2号住居跡が、坏蓋約13cm、坏身約12cmの3、8号住居跡より古い傾向にある。出土点数が少ないが、1号住居跡も2号住居跡に近い。また、土師器甕についても、2号住居跡のものは胴部がやや球形に近い様相を呈し、長胴タイプの8号住居跡

とは明らかに異なる。この時期に両タイプの甕が併存するのもかもしれないが、前者の方が形態的にはより古い様相をもつ。

2期に位置づけられるのは6、7号住居跡である。6、7号住居跡とも出土土器は少ないが、6号住居跡のヘラ切りの坏蓋や7号住居跡の高坏など1期よりも新しい傾向を有する。

なお、4、5、9、10号については良好な出土土器がないので、土器だけでは時期を決定することができない。

次に住居跡群の切り合いをみると、2～5号住居跡および7、10号住居跡が切り合い関係にある。2～5号住居跡については $4 \rightarrow 2 \rightarrow 5$ 3号という切り合いが確認されており、出土土器について2号が3号より古い傾向を有するとした点が、遺構の面からも矛盾をきたさないことが分る。また、7、10号住居跡については遺構の残存状態が悪く不明な点があるが、10→7号の関係であろうと思われる。

前述した出土土器による住居跡の時期区分に、切り合い関係の要素を加えると、大坪遺跡の住居跡群は以下のような変遷で把えることができる。

1期 1～5、8、10号住居跡

このうち、1、2、4、5号住居跡は1期のなかでも古い傾向をもつ

2期 6、7号住居跡（9号住居跡は不明）

古墳時代集落について

大坪遺跡検出の住居跡は、1、2期のように変遷する。しかし、調査区が自然堤防上に展開する集落の末端部に位置するため、集落全体の動態とすることはできない。調査区内に限れば、弥生から古墳時代前半の遺構はほとんどなく、竪穴住居が営まれ本格的に集落といえる形をとるのは古墳時代後期のことである。しかし、このことを長さ数百メートルにわたる自然堤防上での共通した事実として把えるのは早計で、むしろ自然堤防上のある地点では弥生以来集落が断続的にせよ営まれていた可能性が強い（調査区内でも若干の弥生時代の遺構、遺物を若干検出した）。そして、まさに調査区のある自然堤防末端まで集落が拡大する古墳時代後期こそ、弥生時代以来生産の基盤をなしたであろう当地の稲作栽培に、耕地の拡大（生産の増大）などといった一大変革があった時期なのかもしれない。このことは、遺跡東方に展開する伊藤田古窯跡群における生産開始の時期がまさに大坪遺跡1期とほぼ同時期であるという事実とも相互に密接な関連があるに違いない。

3) 歴史時代

倉庫を含む掘立柱建物が5棟検出された。このうち、1号、2号建物から9世紀代に位置づけられる土器が出土した。他の建物もこの時期の所産である可能性が高い。これら建物群がどのような性格をもつものか注目される。また、土壙墓と思われるもののうち1号土坑は出土土器から11、12世紀頃に位置づけられよう。

2号土坑

表19 大坪遺跡出土土器観察表

単位: cm ()は復原

器種	図版番号	法 量			形態の特徴	調整・文様	その他
		口 径	底 径	高 さ			
縄文式土器 浅鉢	3				長くのびた頸部から口縁部が短く立ち上る。	口縁外面に沈線1条 調整は不明、研磨か。	器面の荒れが著しい。

4号土坑

縄文式土器 深鉢	4				口縁部が外方に長くのびる。	口縁外面に沈線が3〜4条以上、 内外面ナデか	5と同一個体
	5				口縁部が外方に長くのびる。	口縁外面に沈線 内外面ナデか	4と同一個体
	6				口縁端部が角ばる。	外面横方向の条痕で一部沈線状、 内面ナデ	
	7				丸味をもつ胴部から頸部が立ち上る。頸部下に軽い段。	内外面ともナデか	
縄文式土器 浅鉢	8				大きく外反する頸部から口縁部がややゆるく立ち上る。	口縁外面には明瞭な沈線はみられない。内外面横研磨か	器面の荒れが著しい
縄文式土器 深鉢	9				やや厚味のある底部で、若干上げ底気味。	内外面ともナデか	

8号土坑

縄文式土器 深鉢	10				頸部立ち上り部分で、かるい段がみられる。	内外面ともナデ	
	11				比較的角ばった口縁端部。	外面に沈線はない 内外面ともナデ	

13号土坑

縄文式土器 深鉢	16				口縁部外反	外面ナデ、内面横方向の条痕、口縁端部に刻みらしきもの	
-------------	----	--	--	--	-------	----------------------------	--

その他の縄文時代遺物

縄文式土器 浅鉢	22				銅部がくの字状に張り、頸部がくびれる。	外面は器面が荒れ調整不明、内面ナデ	
-------------	----	--	--	--	---------------------	-------------------	--

弥生時代遺物

弥生式土器 甕	27	(26.6)			口縁部逆L字状を呈する。 口縁端部は丸味をもつ。	胴部タテ方向のハケ、口縁内外面ヨコナデ、胴部内面ナデ	
------------	----	--------	--	--	-----------------------------	----------------------------	--

1号住居跡

須恵器 環身	29	(13)			口縁立ち上りは内傾気味で比較的高い。	天井部に回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ	色調 胎土 灰色、焼成堅緻 角閃石、斜長石少量
	30				立ち上り部は厚めで、ほぼ直立する。	内外面とも回転ナデか	色調 胎土 灰色、焼成堅緻 角閃石、斜長石
須恵器 環身	31				蓋受けをもたないもので、体部から口縁へ直線的に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ 胴下部に沈線状のもの	色調 胎土 灰色、焼成堅緻 角閃石、斜長石少量 および白色粒子
土師器 甕	32	(13.4)			体部は球状を呈する。 口縁部は比較的薄手で、くの字状に折れる。	外面体部ナデ、口縁内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	胎土 角閃石、斜長石、白色粒子
	33	(20.8)			体部は長胴を呈するものと思われ、厚めの口縁は外反しながら外へ折れる。	器面の荒れが著しく調整は不明だが、胴部内面はヘラケズリの可能性がある	胎土 角閃石、斜長石、石英などを含む
土師器 高環	34				胴部で円柱状の部分から、すそ部に向い広がる。	内面にヘラケズリ 外面タテ方向の面取り	胎土 石英、角閃石、斜長石、白色粒子混入
	35				短脚で、すそ部に向い大きく開く。	外面環部との接合部付近ユビおきえ痕、他はナデ	胎土 斜長石多、角閃石

2号住居跡

須恵器 環蓋	36	(14)		3.6	全体に扁平を感じ。口縁付近では外開き気味に端部へいたる。	外面天井部回転ヘラケズリ 内面天井部不定方向ナデ その他は回転ナデ	色調 焼成 胎土 暗灰色 堅緻 角閃石、白色粒子
	37	(13)		(3.6)	全体に扁平を感じ。 口縁付近は外開き気味で、内面は斜めに端部へいたる。	外面天井部回転ヘラケズリ 内面天井部不定方向ナデ その他回転ナデ	色調 焼成 胎土 灰色 堅緻 白色粒子混入
	38	14		(3.7)	全体に扁平を感じ。 口縁内面が外開き気味に斜めに端部へいたる。	外面天井部回転ヘラケズリ 内面天井部不定方向ナデ その他回転ナデ	色調 焼成 胎土 灰〜黒灰色 堅緻 白色粒子
	39	(15.3)		(4.1)	全体に丸味をもつ感じ。	外面天井部回転ヘラケズリ 内面天井部不定方向ナデ その他回転ナデ	色調 焼成 胎土 灰〜明茶色 堅緻 角閃石
	40	(14.8)		(3.7)	全体に丸味をもつ感じ。	外面天井部回転ヘラケズリ(?)の らナデ、内面天井部不定方向ナ デ、その他回転ナデ	色調 焼成 胎土 青灰〜淡茶灰色 堅緻 白色粒子
	41	(13.4)		(3.5)	全体にやや丸味をもつ。	外面天井部回転ヘラケズリ(?)の ちナデ、内面天井部不定方向ナ デ、その他回転ナデ	色調 焼成 胎土 黄白色 軟質 角閃石、小砂粒
	42				天井部との境にかるい沈線状の段がつく。 口縁内面に沈線が1条。	外面天井部回転ヘラケズリ その他回転ヨコナデ	色調 焼成 胎土 灰色 堅緻 角閃石、斜長石少量

単位: cm () は復原

器種	図版番号	法量			形態の特徴	調整・文様	その他
		口径	底径	高さ			
土師器 マド	69				焚口に沿い底が付く。	外面ナデ 内面ナデ、同心円タキ後ナデ	色調 黄色～明茶褐色 胎土 角閃石、斜長石

4号住居跡

土師器 甕	71	(18.6)			口縁は頸部からいったん立ち上り、外へ折れる。	外面器面荒れ不明 口縁内面ヨコナデ 体部内面横方向のケズリ	色調 茶褐色 胎土 斜長石多、角閃石
----------	----	--------	--	--	------------------------	-------------------------------------	-----------------------

6号住居跡

須恵器 環蓋	73				頂部が平坦面をなす。	外面天井部ヘラ切り、内面天井部に不定方向ナデ	色調 黄褐色～暗黄褐色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石少量
須恵器 埴蓋	74	(10.6)	3.2		口縁部が若干開き気味。	内面天井部不定方向ナデ その他は回転ナデ	色調 灰色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石少量
土師器 甕	75	(13.2)			口縁は体部からゆるやかに外反。	口縁外面ヨコナデ 内面ナデ	色調 明黄褐色 胎土 斜長石多い、角閃石

7号住居跡

須恵器 環身	76				やや厚目の立上り部が内傾気味に立つ。	内外面回転ナデ	色調 紫灰色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石少量
須恵器 高環	77			(10.6)	短脚で、すそに向いのびるが、途中でいったん折れる。端部は上下につまみ出す。	坯部内面回転ナデ、不定方向ナデ 脚部内外面回転ナデ	色調 灰色 胎土 角閃石少量、白色粒子を含む
土師器 甕	78	17.2			長胴の体部で、口縁はゆるやかに外反しながら外へ折れる。	体部外面荒いたテハケ 口縁内外ヨコナデ 体部内面ヨコハケ	色調 黄褐色 胎土 角閃石多、石英粒

8号住居跡

須恵器 環身	84	11.9		3.9	立ち上がり部は直線的に高く立ち上がるが、やや外反気味。	全体に器面が荒れ調整不明、外面下半に回転ケズリ痕らしきものがあるが、底まで及んでなくナデか、その他内外面回転ナデ	色調 白黄色 焼成 軟質 胎土 角閃石、斜長石少量
	85	12.1		4.0	立ち上がり部は基部が厚く、尖り気味に短く立ち上がる。	外底面回転ヘラケズリ その他回転ナデ 内底面不定方向ナデ	色調 青灰色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石少量
	86	12.2		4.0	立ち上がり部は基部が厚く、三角形状に立ち上がる。	外底面は一部回転ケズリの痕跡があるが器面が荒れているため詳細不明、内底面は不定方向ナデがみられる	色調 白黄色 焼成 軟質 胎土 角閃石、斜長石
	87	11.8		4.0	口縁付近の形態は86にきわめて類似する。	外面体部下半に回転ケズリらしい痕跡、底面は静止ケズリ他は器面が荒れ不明瞭であるが回転ナデか 外底面にヘラ記号	色調 白黄色 焼成 軟質 胎土 角閃石、斜長石
	88	11.5		3.7	立ち上がり部は内傾気味に立ち端部が角ばる。	外底面回転ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ、内底面不定方向ナデ、外底面にヘラ記号	色調 淡いあざき色 焼成 堅緻 胎土 角閃石少量、白色粒子含む
	89	(12.4)			立ち上がり部は直線的に立つ。	外底面はナデ、おさえ その他の内外面は回転ナデ 内底面不定方向ナデ	色調 暗灰色 焼成 堅緻 胎土 角閃石や白色粒子を含む
	90	(12.0)			立ち上がり部、受部周辺が厚く内傾気味に立ち上がり部が立つ。	外底面付近ユビによるおさえ その他の内外面回転ナデ 内底面不定方向ナデ	色調 赤褐色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石、石英含む
	91	(12.0)		4.4	立ち上がり部は内傾気味に比較的高く立ち上がる。	外底面回転ヘラケズリ その他は回転ナデ 内底面は不定方向ナデ	色調 灰～青灰色 焼成 堅緻 胎土 白色粒子
土師器 小型甕	92	(5.1)			球状の体部から口縁わずかに外反する。口縁端部は尖り気味。	器面荒れ調整不明な部分もあるが内外ナデか 手づくねか	色調 赤褐色 胎土 角閃石、斜長石
土師器 瓶	93	(28.4)			体部が外開き気味に立ち上がるが、口縁がちかくでやや外反。	内外面ナデ	色調 黄褐色 胎土 斜長石と角閃石を多く含む
	94				把手部分である。	ナデ、ユビおさえ	色調 赤褐色 胎土 斜長石、白砂粒
土師器 甕	95	(16.6)			体部はやや肩が張る。 口縁は外反しながら若干外へ折れる。	口縁内外面ヨコナデ 体部は器面が荒れ不明	色調 暗褐色 胎土 斜長石、角閃石
	96	(24)			肩はあまり張らない。口縁は厚手で、尖り気味に外へ折れる。	体部外面ケテハケ 口縁内外面ヨコナデ 体部内面不明だがケズリか	色調 赤褐色 胎土 斜長石、5mmほどの白色レキ

単位：cm ()は復原

器種	図版番号	法 量			形態の特徴	調整・文様	その他
		口 径	底 径	高 さ			
須恵器 環 蓋	43				全体に丸味をもつ感じか。	内外面回転ナデ 内面にヘラ記号	色調 灰色 焼成 堅緻 胎土 砂粒少ない 39と同一個体の可能性
	44				天井部は丸味をもつ。	外面天井部回転ヘラケズリ 内面天井部不定方向ナデ、その他 回転ナデ、内面ヘラ記号	色調 暗灰色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石含む
須恵器 環 身	45	13.1		4.2	口縁立ち上がり部は短く厚く、 受部も厚い。	外面底部ナデか 内底面不定方向ナデ その他は回転ナデ	色調 白黄色 焼成 胎土 胎土 斜長石、角閃石若干
	46	(12.2)		4.2	口縁立ち上がり部、受部ともに 薄手で、立ち上がり部は内傾気 味である。	外面底部ナデ 内底面不定方向ナデ その他は回転ナデ	色調 赤褐色～灰黄色 焼成 胎土 胎土 白色粒子
	47	(12.8)			受部周辺が厚い。立ち上がり部 はやや内傾気味に立つ。	内外面とも回転ナデ、器面の荒 れが著しく不明な部分も	色調 白黄色 焼成 軟質 胎土 斜長石、角閃石
	48	(14.3)			受部周辺が厚い。立ち上がり部 はやや内傾気味に立つ。	内外面とも回転ヨコナデか	色調 白黄色、焼成 軟質 胎土 角閃石
須恵器 高 環	49		(9.4)		端部は上下につまみ出す。	内外面とも回転ヨコナデ	色調 黄白色、焼成 軟質 胎土 角閃石、斜長石、石 英など少量含む
土 師 器 環 か	50	(12)			全体に丸味をもつ器形で、口縁 は直立気味に端部へいたる。	器面の荒れが著しく詳細不明だ が内外ナデか	色調 黄褐色 胎土 角閃石、斜長石など
土 師 器 甕	51	20.4			体部は肩が張らず胴部中に最大 径がくる。口縁はゆるく外反 しながら外へ開く。	外面体部タテハケ 口縁内外面ヨコナデ 内面体部ヨコハケ	色調 黄褐色 胎土 角閃石、斜長石など
	52				口縁は短めで、体部がゆるやかに 外反する。	外面体部、口縁内面ナデ 体部内面は器壁が荒れ不明	色調 茶褐色 胎土 角閃石、斜長石
土 師 器 甕	53	(27.4)			若干外反しながら直立気味に口 縁へいたる。	器面が荒れ調整不明だが、内外 ナデか	色調 黄褐色 胎土 角閃石、斜長石多
土 師 器 甕	54				体部は肩が張らず胴部中に最大 径がくる。口縁はゆるく外反 しながら外へ開く。	外面体部タテハケ 口縁内外面ヨコナデ 体部内面タテ方向のケズリ	色調 黄褐色 胎土 角閃石、斜長石

3号住居跡

須恵器 環 蓋	56	(13.2)		3.3	全体にやや丸味をもつ。	外面天井部回転ヘラケズリ 内面天井部不定方向ナデ その他は回転ナデ	色調 白灰～黄灰色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石
	57	(12.4)		(3.8)	全体に丸味をもち、頂部がやや 平坦になる。	外面天井部ケズリのちナデ 内面天井部不定方向ナデ その他回転ナデ	色調 淡灰色 焼成 堅緻
須恵器 壺	58	(12.4)			頸部が外傾気味に立ち、玉縁状 の口縁へ続く。口縁は折り返し。	外面回転ナデ 内面ナデ	色調 明黄灰色 焼成 やや軟質 胎土 角閃石、斜長石
須恵器 罎	59	(6)			肩部が張り最大径となる、口縁 へは内傾しながら続くが、口縁 ちかくで直立する。	外面胴下部回転ヘラケズリ その他回転ナデ	色調 明灰色 焼成 堅緻 胎土 角閃石、斜長石
	60	(7.8)			扁球形の胴部で、胴部最大径の 部分に沈線がみられる。口縁は 短くくの字状に外へ折れる。	外面体部下半部は器面が荒れ調 整不明。	色調 明灰色 焼成 堅緻 胎土 砂粒少ない
須恵器 高 環	61			(8.4)	端部は下方につまみ出す。	内外面回転ヨコナデ	色調 淡灰色 焼成 堅緻 胎土 白色粒子混入
赤焼土器 高 環	62				筒状の脚部で、端部へむかいゆる やかに開く。	外面は器面が荒れ調整不明だが ナデか、内面下半は回転ナデか	色調 明茶褐色 胎土 角閃石、斜長石多い 土師器にちかい
土 師 器 高 環	63				筒状の部分から折れ、すそへの びる。	器面が荒れ調整不明だが、内外 ともナデか	色調 黄褐色 胎土 角閃石、斜長石
赤焼土器 甕	64	(19)			口縁くの字状に外へ折れる。 端部は丸くつくる。	外面体部カキ目 口縁内外面回転ナデ 体部内面同心円タタキ後ナデ	色調 赤褐色 胎土 角閃石、斜長石
	65	(18.6)			体部は肩があまり張らず、中程 で最大径となる。口縁はくの字 状に折れ、直線的にのびる。端 部付近でやや外傾する。	外面体部平行タタキのちカキ目 口縁内外面回転ナデ 体部内面同心円タタキのちナデ	色調 明茶褐色 胎土 角閃石、斜長石多い 5mm大のレキ
	66				口縁くの字状に折れ、直線的に 端部へ。	外面体部カキ目 口縁内外面ナデ 体部内面同心円タタキ後ナデ	色調 黒褐色 胎土 角閃石、斜長石
土 師 器 甕	67	(12.4)			口縁部ゆるくの字状に外へ折 れる。	外面ナデ 内面ヨコナデ	色調 淡赤褐色～暗褐色 胎土 角閃石、斜長石
土 師 器 甕	68	(27)			丸味をもつ体部下半から直線的 に口縁へいたる。端部は角ばる。	外面ナデか 内面ナデおよび下半にタタキ	色調 黄褐色 胎土 角閃石、斜長石

単位：cm ()は復原

器種	図版番号	法量			形態の特徴	調整・文様	その他
		口径	底径	高さ			
土師器 甕	97	18.8		(33.2)	体部は長胴形で、口縁部は厚手で外へ折れる。口縁端部は丸味をもつ。底部は丸底か。	体部外面ナデ 口縁内外面ヨコナデ 体部内面タテ方向のケズリ	色調 淡褐～茶褐色 胎土 角閃石、白色砂粒
	98	17.6			体部は球形を呈し、口縁がゆるやかに外へ折れる。端部はやや角ばる。	体部外面ナデ 口縁内外面ヨコナデ 体部内面タテ方向のケズリ	色調 赤褐色～茶褐色 胎土 石英、角閃石
	99	18.2		34	体部は長胴形、口縁は体部と同じ厚さで、くの字状に外へ折れる。	体部外面ナデ 口縁内外面ヨコナデ 体部内面タテ方向のケズリ	色調 淡黄灰色 胎土 角閃石、斜長石 胴部にスス付着

10号住居跡

土師器 甕	100	(11)			体部から口縁がゆるやかに外反する。	内外面ともナデ	色調 茶褐色 胎土 角閃石など
----------	-----	------	--	--	-------------------	---------	--------------------

5号土坑

土師器 高坏	101				高坏脚部で筒状を呈する。坏部との接合部は円盤充てんの技法がみられる。	外面タテハケ、ナデ 内面横方向のヘラケズリ	色調 赤褐色 胎土 角閃石、斜長石
土師器 甕	102	(18)			口縁部が体部最大径となる。口縁部は短く、ゆるやかに外反する。	内外面ともナデ	色調 明褐色 胎土 角閃石、斜長石を多量に、3mm大のレキ

6号土坑

土師器 甕	103	(20.2)			口縁部大きく外反しながら外へ折れる。	口縁内外面ヨコナデ 外面頸部にユビおさえ痕 内面ハケの痕跡あり	色調 淡黄褐色 胎土 斜長石、角閃石、金雲母
----------	-----	--------	--	--	--------------------	---------------------------------------	---------------------------

18号土坑

須恵器 坏身	104				立ち上り部は直立気味に立つ。	体部内外面ヨコナデ	色調 暗灰色 胎土 斜長石、砂粒は全体に少ない
土師器 甕	105	(20.4)			口縁外反しながら外へ折れる。	体部外面タテハケ 口縁内外面ヨコナデ 体部内面ナメのハケ	色調 淡黄色 胎土 角閃石、斜長石、金雲母

1号建物

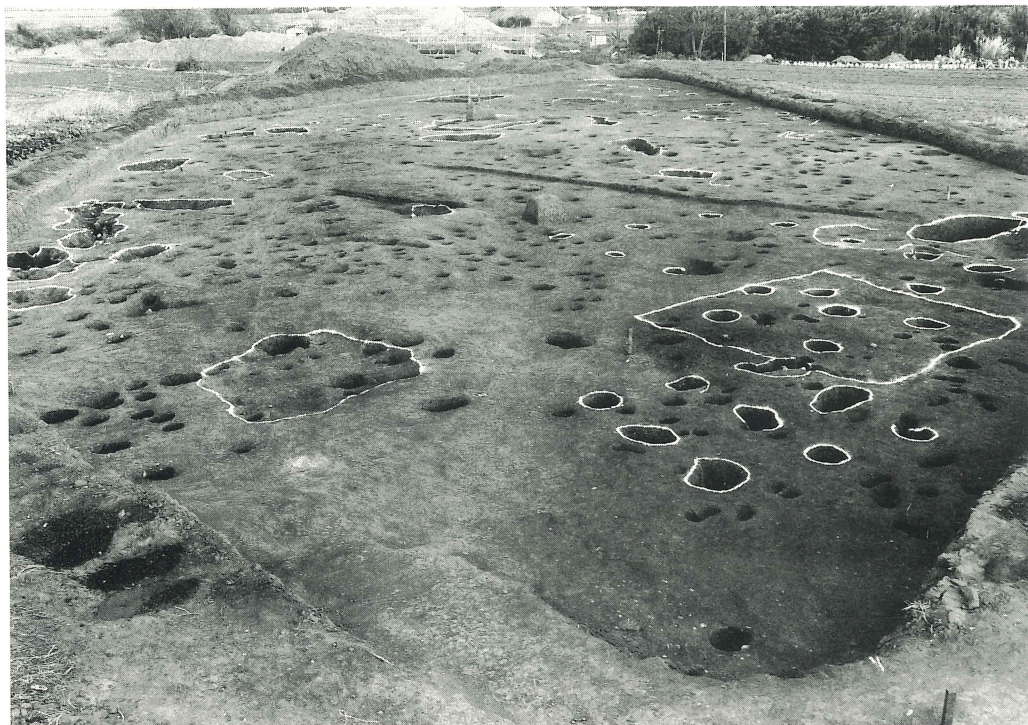
土師器 坏	106	12.9		2.4-4	体部か底部がゆるやかに立ち上り、口縁は外反する。	底部へラ切り 体部内外面ヨコナデ	色調 赤褐色 胎土 角閃石、斜長石を多量に含む
----------	-----	------	--	-------	--------------------------	---------------------	----------------------------

2号建物

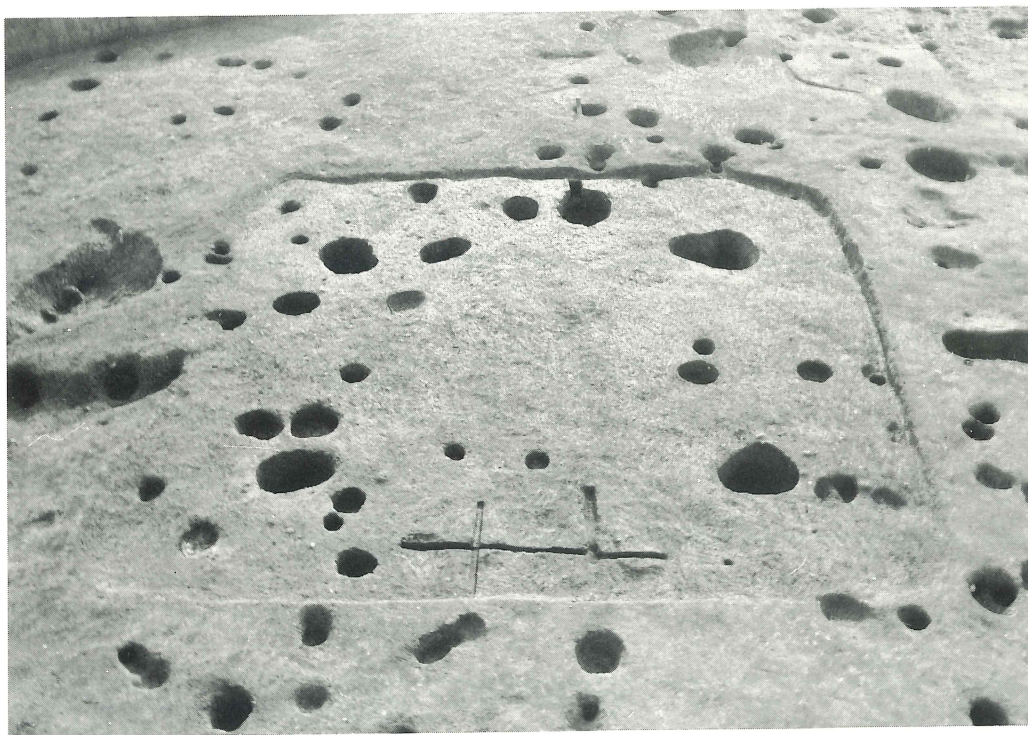
土師器 坏	107	(13.2)		3.8	体部の立ち上りは106に比べきついで、口縁はわずかに外反する。	底部へラ切り 体部内外面ナデ 内底面ユビおさえあり	色調 赤褐色 胎土 角閃石、斜長石多い
----------	-----	--------	--	-----	---------------------------------	---------------------------------	------------------------

1号土坑

土師質土器 坏	108			7	底部から体部が斜めに立ち上がる。	底部切り離し不明 器面が荒れ不明だが体部内外面、内底面はナデか、内底面にはユビナデによる凹凸	色調 白黄色 胎土 角閃石、斜長石
------------	-----	--	--	---	------------------	---	----------------------



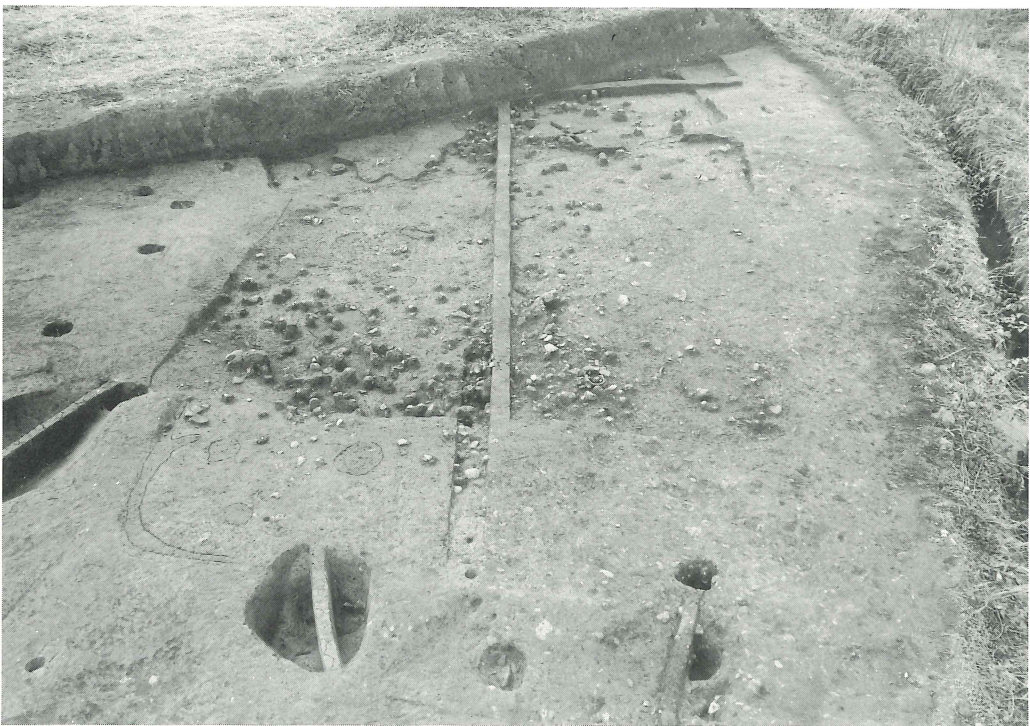
大坪遺跡未掘状況



1号住居跡（北東から）



2～5号住居跡検出状況



2～5号住居跡遺物出土状況



2～5号住居跡（北から）



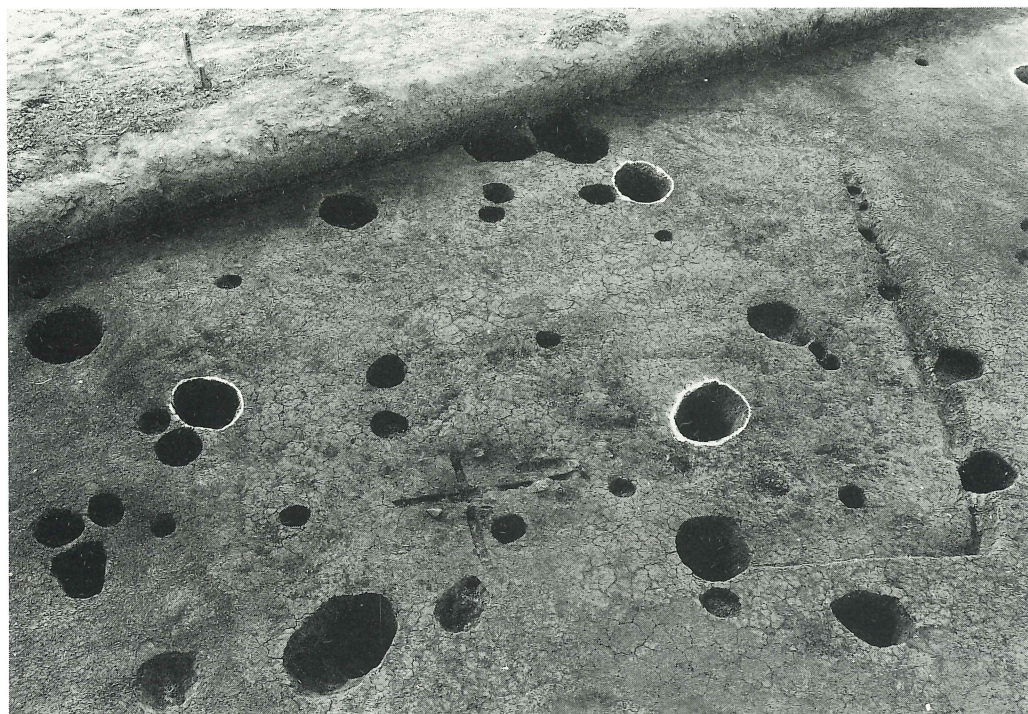
2～5号住居跡（南から）
348



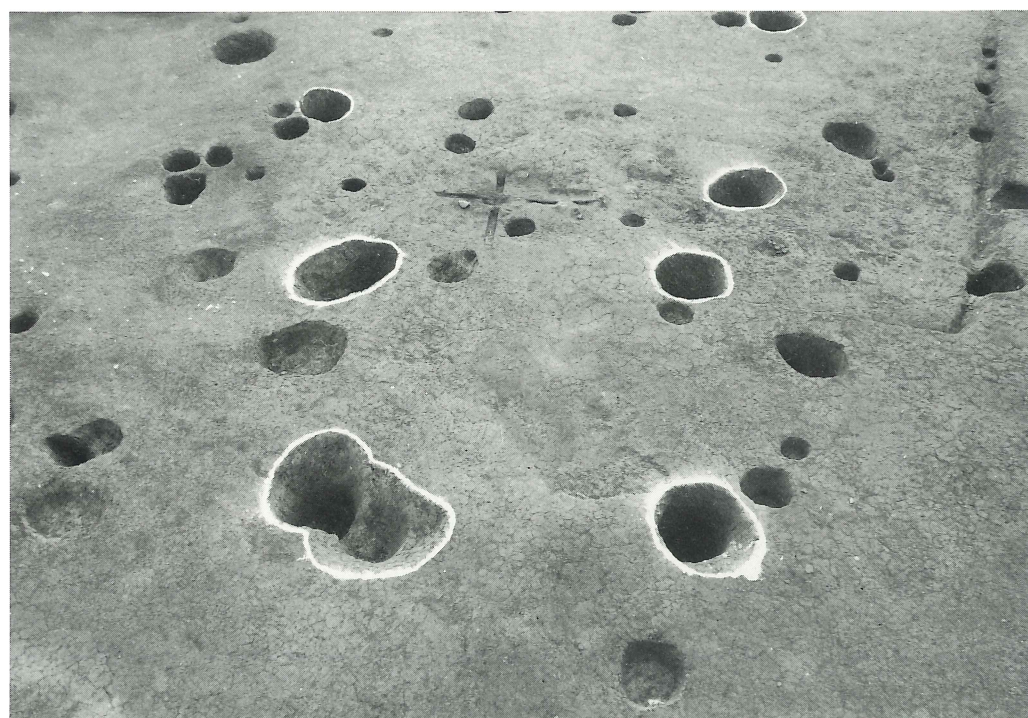
6号住居跡（東から）



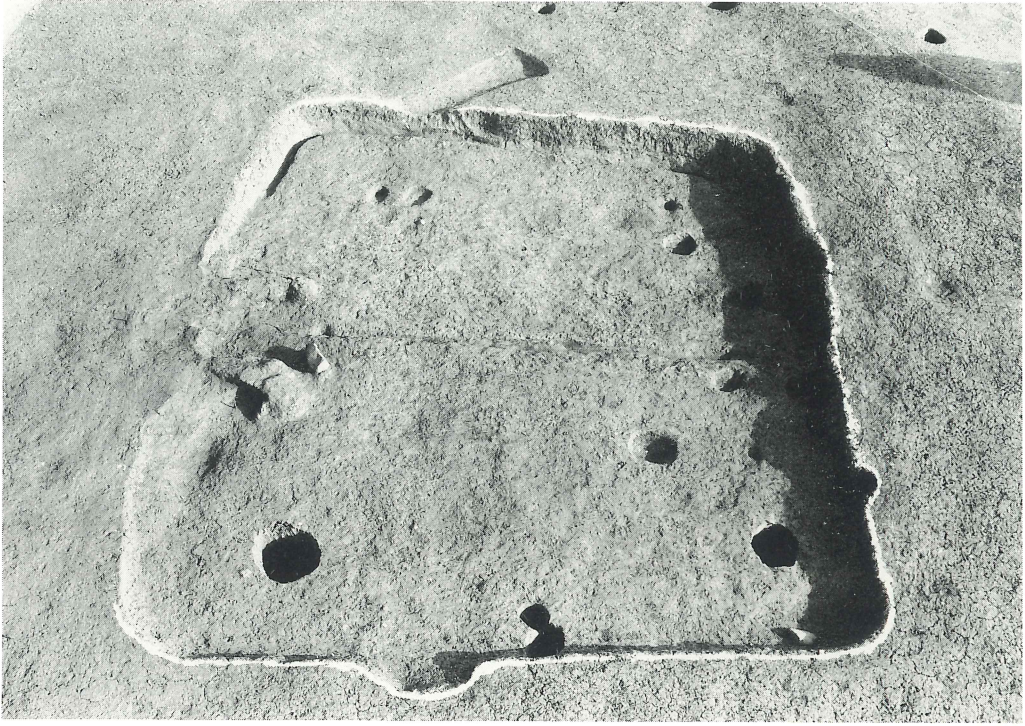
6号住居跡カマド



7号住居跡（北東から）



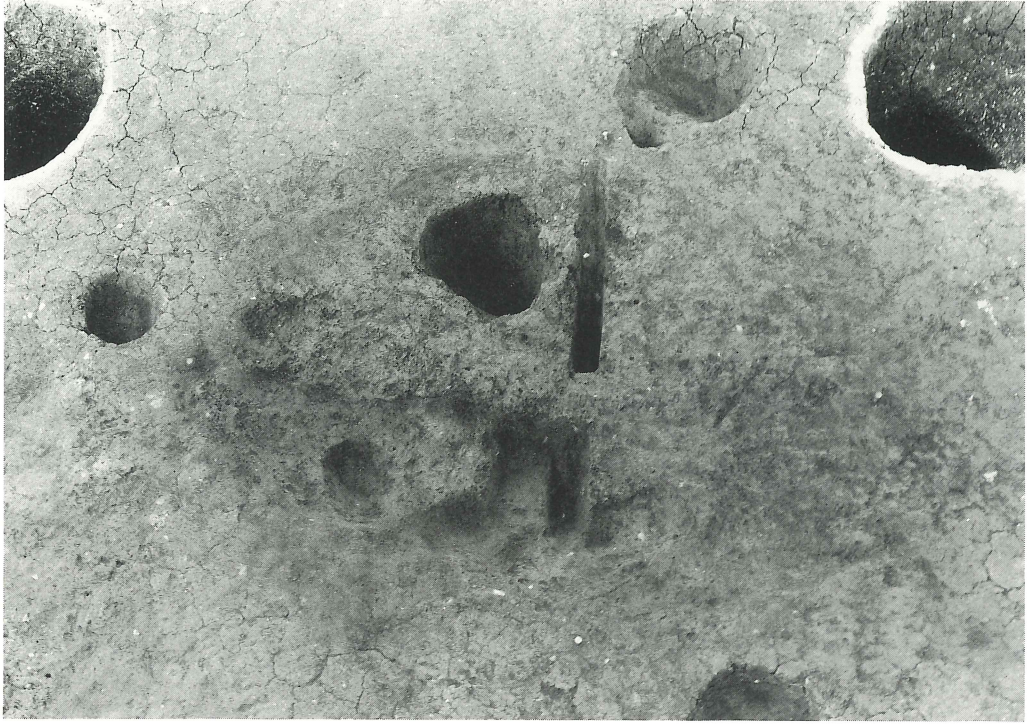
7号, 10号住居跡



8号住居跡（北西から）



8号住居跡カマド



7号住居跡カマド



7号住居跡遺物出土状況



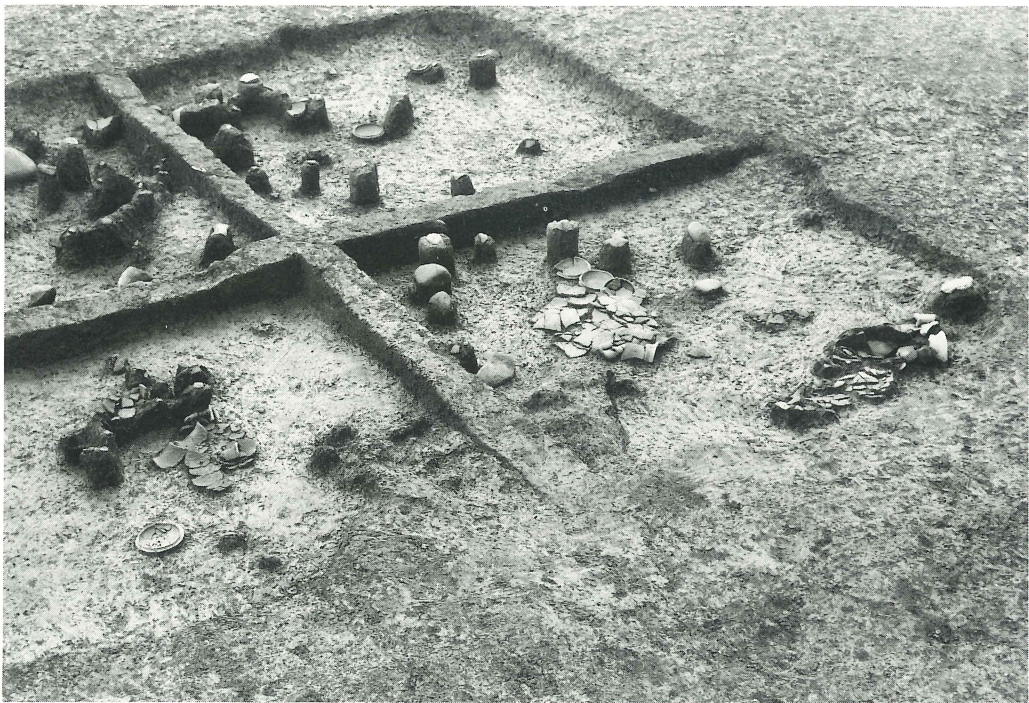
8号住居跡遺物出土状況(3)



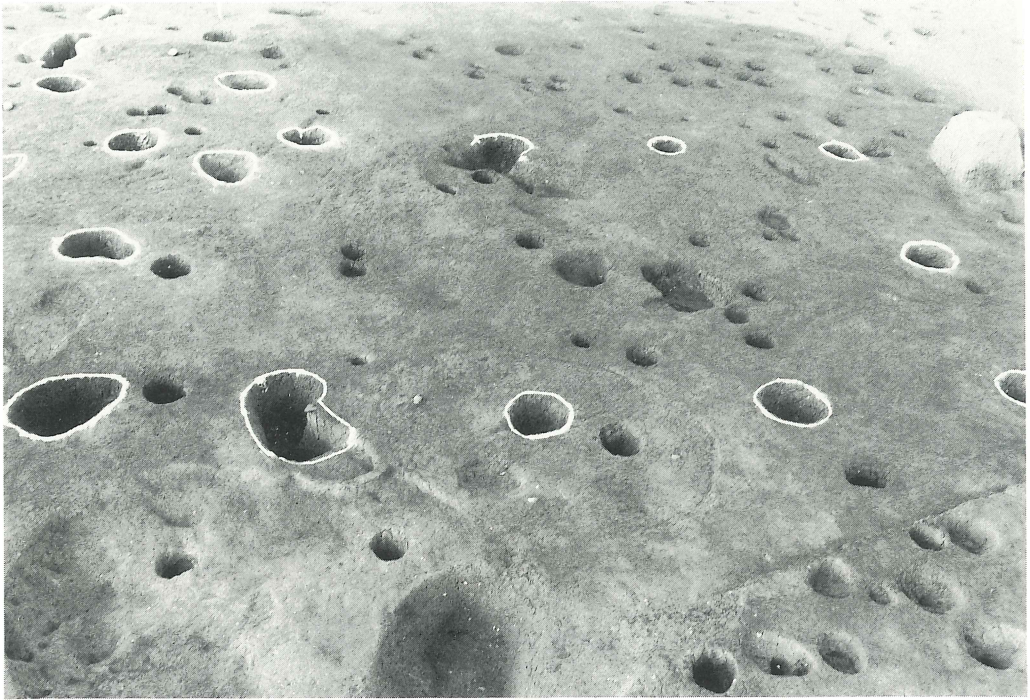
8号住居遺物出土状況(4)



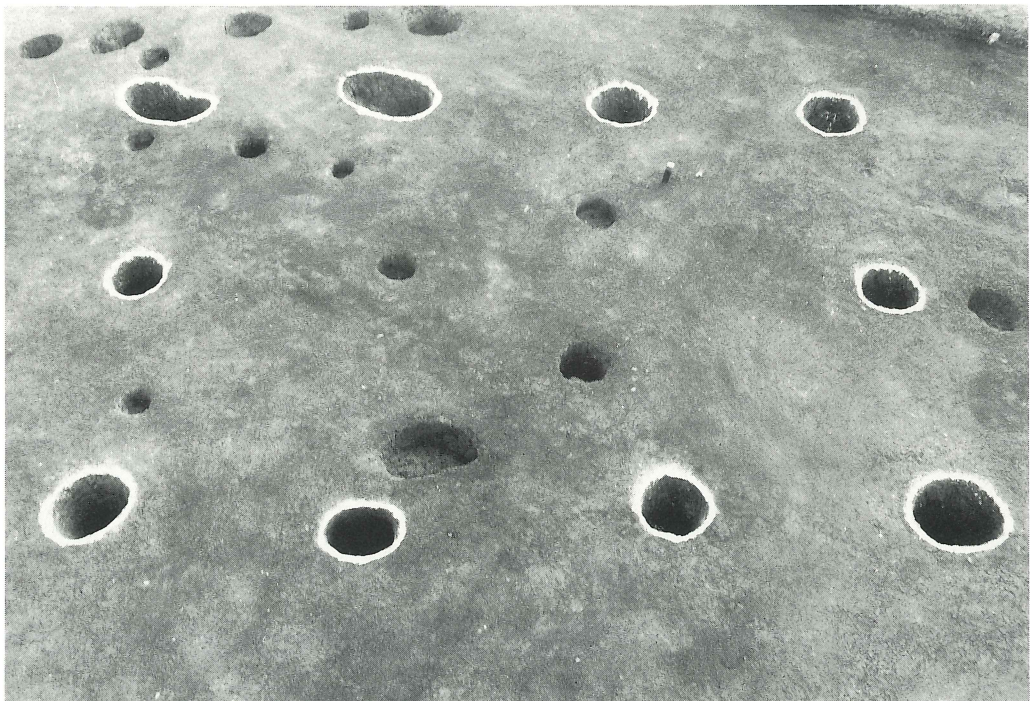
8号住居跡遺物出土状況（南西から）(1)



8号住居跡遺物出土状況(2)



2号建物（南から）



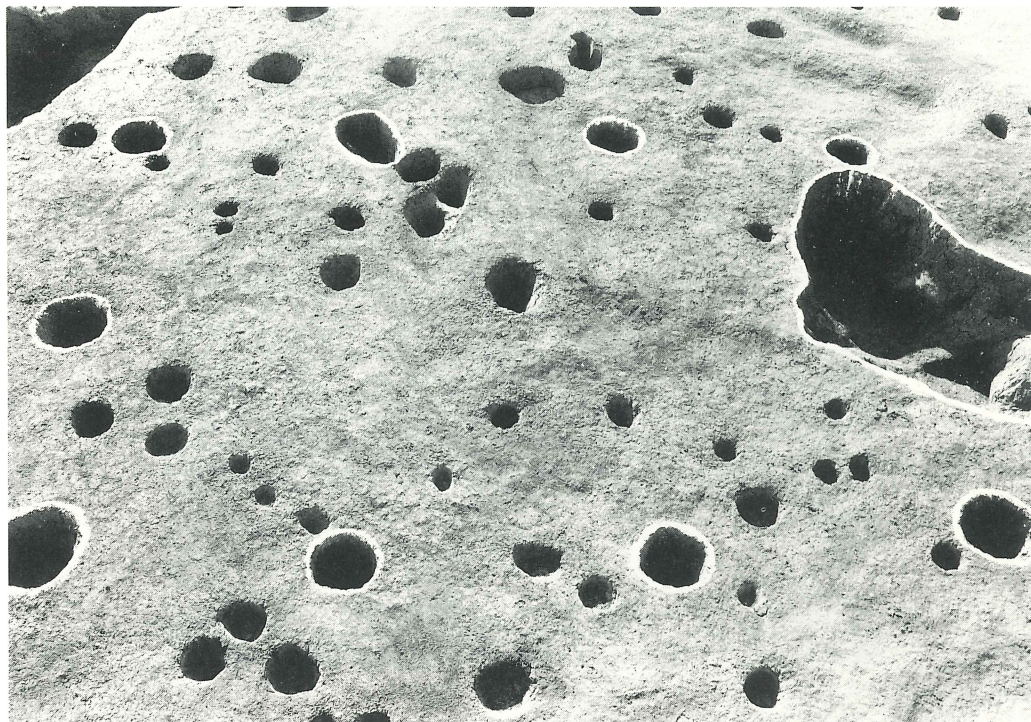
3号建物（北から）



9号住居跡（北西から）



1号遺物（北東から）



4号建物（東から）



5号, 6号土坑（西から）



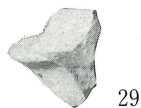
1号土坑（北西から）



4号土坑（南から）



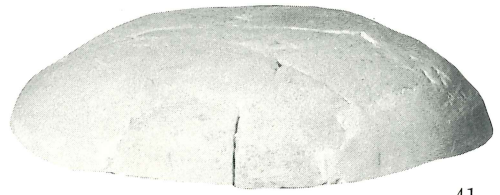
4号土坑



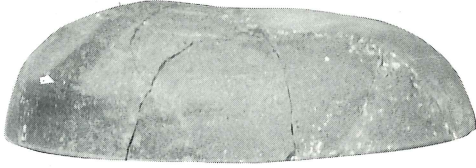
1号住居跡



38



41



51



46



51

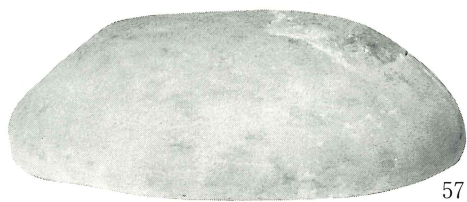


54



69

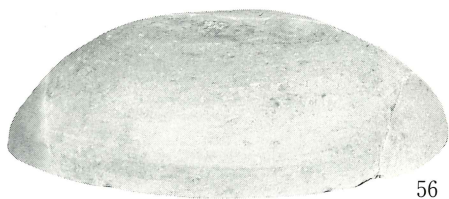
2号住居跡



57



58



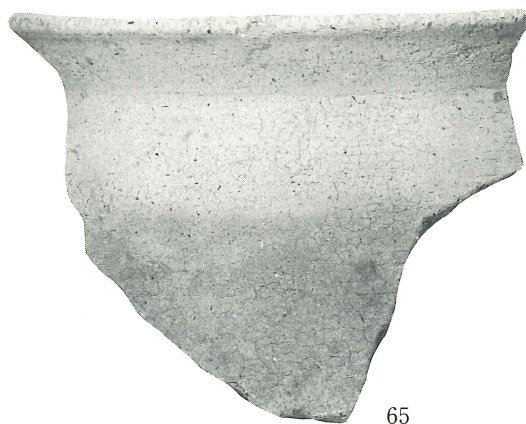
56



59



62



65



64

3号住居跡

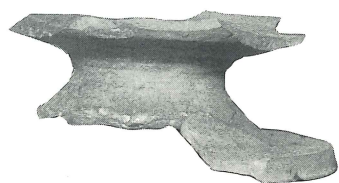


73



74

6号住居跡

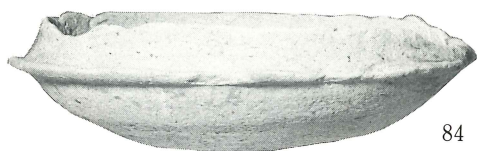


77

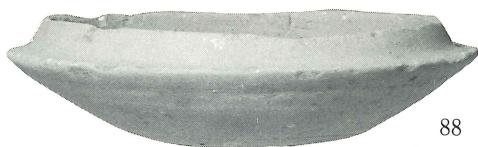


78

8号住居跡



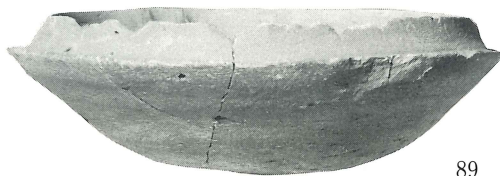
84



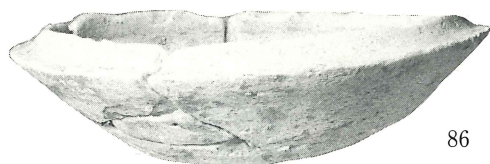
88



85



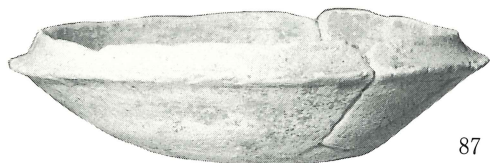
89



86



91



87

7号住居跡



98



97



99



93

8号住居跡



80



81



82



83

8号住居跡土錘



55

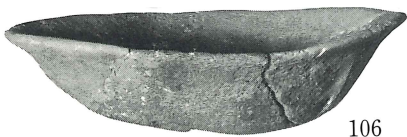
3号住居跡

滑石製紡錘車



70

4号住居跡



106

1号建物



1号土坑

108

權 現 島 遺 跡

第7節 権現島遺跡

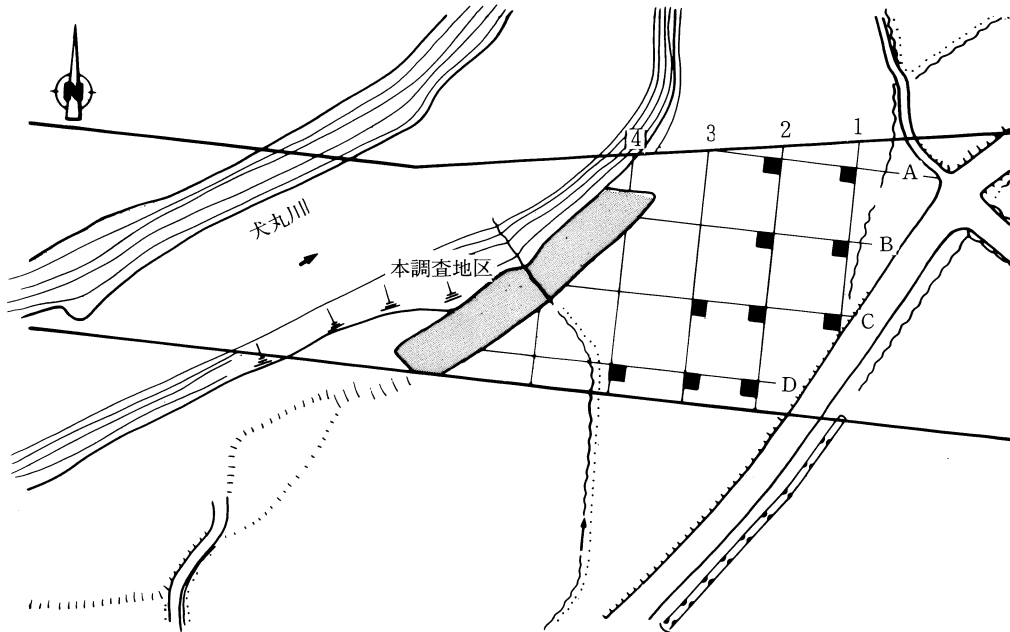
1. 遺跡の概要

権現島遺跡は中津市大字加来字権現島に所在する。遺跡は、犬丸川右岸に位置し、標高約20mを測る。犬丸川川床との比高差は約4mである。

遺跡西側の犬丸川対岸には樋多田遺跡（中津バイパス建設に伴い昭和60、61年度調査）があり、縄文～古墳時代にいたる遺構・遺物が確認されている。ここでは、川に沿う自然堤防とその西側に広がる旧低湿地と地形的に大きく異なる様相をもつ。自然堤防上からは弥生、古墳時代の住居跡が、また旧低湿地部の弥生時代流路からは、多量の流木などとともに、鍬などの木器、杭、加工材などが出土した。

一方、権現島遺跡の東側はすぐに山地となる。山の中腹には古墳時代後期の洗添横穴墓があり、平野部との比高差約50mの山頂から尾根上には、弥生時代中期の集落、墓地などを中心とする森山遺跡（中津バイパス建設に伴い昭和62年度調査）がある。森山遺跡からは、中津平野はもとより遠く周防灘や山口県までも望むことができる。

権現島遺跡の調査は、昭和60年度にグリッド調査による試掘を約1,000m²にわたり行なった。その結果、縄文後期の包含層および中世の遺構、遺物などが確認された。このなかで本調査は、橋脚下部工事に伴い破壊を回避しえない部分約180m²について実施した。本調査では



第233図 権現島遺跡調査区位置図 (1/1,000)

中世の溝を含むいくつかの溝状遺構と柱穴などを検出した。

2. 基本層序

権現島遺跡における基本層序を述べる。

I、II層は現水田耕作土と水田床土である。III層は暗褐色土層で、主として中世までの遺物を含む。犬丸川に近づく程厚く、厚い部分で約20cmである。III層上面で検出できる遺構もある。IV層は小礫と砂からなる砂礫層で、厚いところで30cm程である。V層は黄白色粘土層、VI層は青灰色粘土層で、VI層は下部になるほど硬くしまってくる。VI層には縄文後期土器が包含される。なお、III、IV、V層については削平のためか、みられない部分もあるが、川に近いほどI～VI層の層序が整然と観察された。

3. 遺構と遺物

1) 縄文時代

縄文時代の遺物はVI層から出土する。しかし、その遺物包含状況は非常に疎で、C2グリッドから出土したのみである。川沿いの本調査区においても調査区を設定し、VI層を掘り下げたが、遺物の出土はなかった。C2グリッド出土遺物についてもローリングが認められることから、包含層については必ずしも良好な状態ではないと判断される。

遺物については、第236図1、2がC2グリッド出土のものである。1は底部で、底部付近まで垂下がる2本の沈線と、底部に沿い施される1本の沈線がみられる。2は胴部破片で沈線による文様がみられる。第236図3は1号溝内出土の底部で、内面には貝殻条痕がみられる。

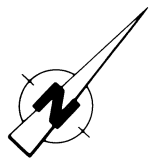
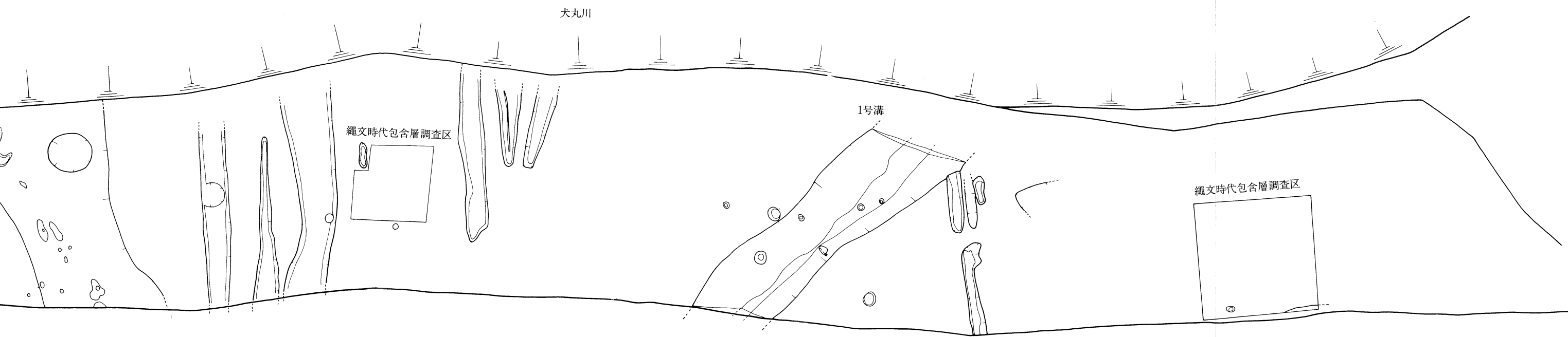
2) 歴史時代

歴史時代の遺構として、本調査地区および試掘グリッドにおいて、溝状遺構、柱穴などを確認した。溝状遺構のうち1、2号溝以外は犬丸川に直交する浅いもので、その性格は不明である。また、柱穴についても建物を復原するにはいたらなかった。以下、主な遺構について述べる。

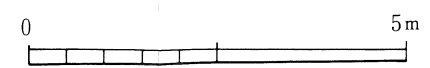
1号溝（第235図）

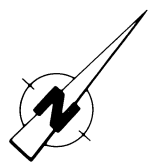
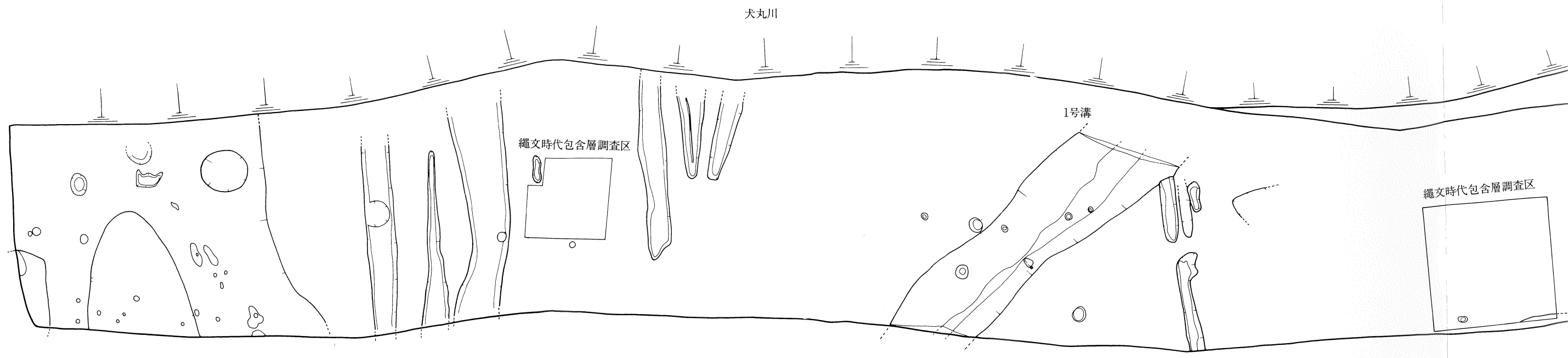
溝は南東から北西に向い走るもので、犬丸川に斜交する形をとる。幅約2.2m、深さ約1.3mで断面はV字形に近い。土層図で分るように溝は主に西側からの流入土により埋没している。

遺物は細片が多いが、このうち4は青白磁合子の蓋である。外面に不鮮明な花卉状の文様が施される。第236図5、6は瓦器坑である。5は口縁部で復原口径19cm、6は底部で断面三角

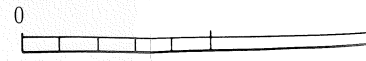


第234図 権現島遺跡遺構配置図





第234図 権現島遺跡遺構配置図



形の高台が付く。

2号溝

試掘調査の際、C2グリッドで検出された。南北方向に走るもので、幅約70cm、深さ約40cmで、断面V字形を呈する。

出土遺物は細片で器形を復元できるものは少ない。このうち第236図7は白磁碗口縁部である。口縁端部が外方に折れる。

その他の遺物

本調査区南端部の包含層から多くの遺物が出土した。瓦器片などの細片が多いが、以下器形のはわかるものについて紹介する。

8~10は瓦器坑である。いずれも断面三角形の高台を付けるが、8、9が10に比べ断面がやや丸味をもつ高台である。

11は瓦質の土鍋口縁部である。口縁下に突帯状のつばが付される。

4. まとめ

権現島遺跡は小範囲の調査ではあったが、縄文時代と歴史時代の遺構、遺物を検出した。

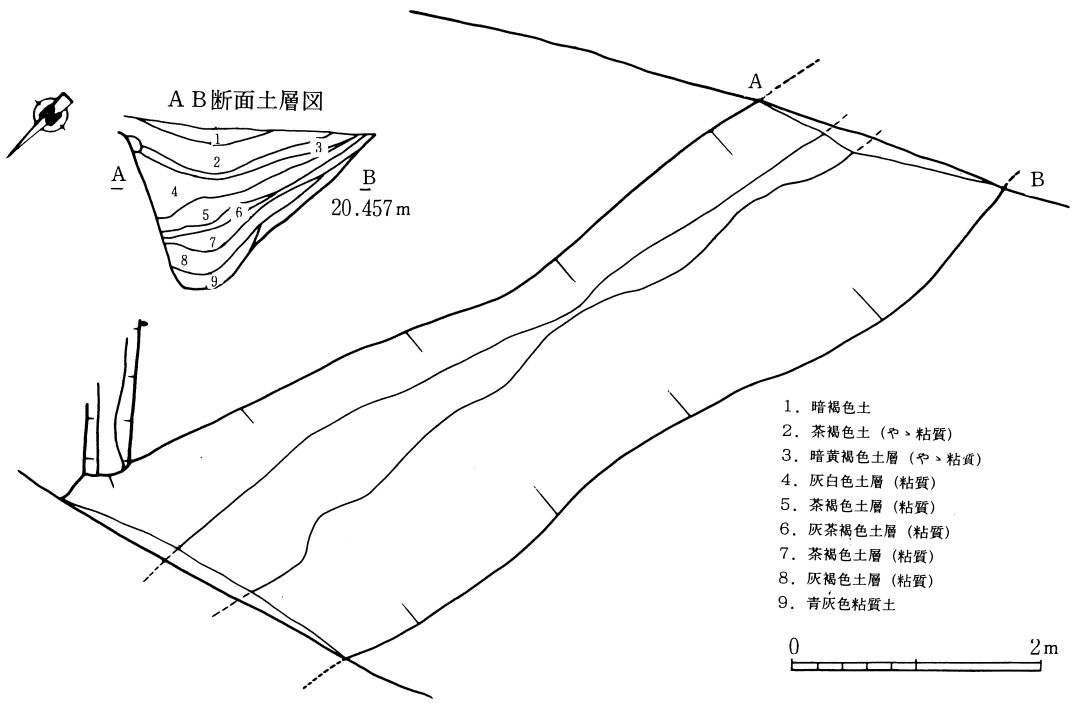
縄文時代については、出土状況が良好ではないが若干の遺物が出土した。時期的には後期前葉に位置づけられるもので、付近で縄文人の生活が営まれたであろうことを推定させる資料となる。遺跡の北方、犬丸川下流には縄文後期の植野貝塚や棒垣貝塚があり、これらを中心に下毛原台地周辺には黒水、清水郎原西遺跡などの同時期の小遺跡群が点在する。権現島遺跡もこれら小遺跡群のひとつとして扱えられよう。

一方、歴史時代については溝状遺構などが検出された。なかで規模が大きいものは断面V字形を呈する1号溝で、犬丸川と斜行する。出土遺物から時期的には13世紀頃と思われる、同様な時期の遺物は包含層中からも多数出土している。その量から、当地が居住地の地であった可能性が推定され、1号溝もそれに係るものであろう。

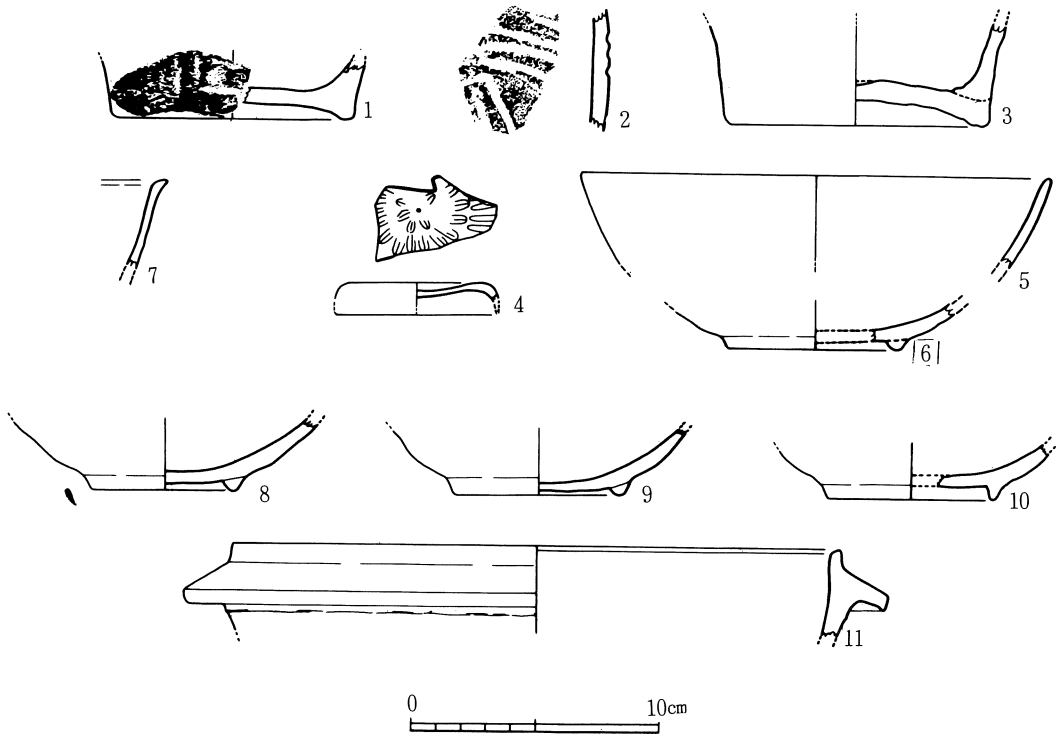
表20 権現島遺跡出土土器観察表

単位: cm ()は復原

器 種	図版 番号	注	口径	底径	高さ	形 態 の 特 徴	調 整 ・ 文 様	そ の 他
縄文式土器 深 鉢	1			(9.8)		あけ底状を呈する	内外面ナデ、外面にタテ沈線2条 ヨコ沈線1条	色調 黄白色 胎土 角閃石、斜長石
	2					断面片	沈線文を帯す 内外面ナデか	色調 黄白色 胎土 角閃石、斜長石
	3			(10.3)		あけ底状を呈する	外面面条傷 その他はナデ	色調 黄白色-赤褐色 胎土 斜長石、角閃石、石英
青白磁合子蓋	4				中央が凹み丸味	上面に花文 内外面に施線		
瓦 器 埴	5	(18.8)				口縁直口	内外面ともナデか	色調 黄白色 胎土 斜長石、角閃石少量
	6			(7)		断面かまぼこ状の高台が付く	内外面ともナデか	色調 黄白色 胎土 斜長石、角閃石少量
白磁 碗	7					口縁端部が外方に折れる	内外面とも灰色釉	
瓦 器 埴	8			(5.5)		断面三角形の高台が付く	内外面ともナデか	色調 黄白色 胎土 斜長石、角閃石
	9			(6.8)		断面三角形の高台が付く	内外面ともナデか	色調 黄-茶褐色 胎土 斜長石、角閃石
	10			(6.8)		断面三角形のやや高めの高台がつく	内外面ともナデか	色調 灰色 胎土 斜長石、角閃石
瓦質土器 土 鍋	11	(24.4)				体部は内溝丸味に口縁へいたり口縁部は黄ばる。口縁下に突帯状のつばがめぐる	外面体部ナデ 外面つばから口縁にかけてヨコナデ 内面ヨコ方向のナデ	色調 黄褐色-暗褐色 胎土 角閃石、斜長石多量 外面にスス状付着物



第235図 1号溝平面図及び土層図



第236図 出土遺物実測図



権現島遺跡発掘状況



C-2グリッド2号溝



調査区全景（北西から）



調査区北西部



1号溝



1号溝断面土層

第三章 総括

一般国道10号中津バイパスに伴う発掘調査では、初期横穴墓を含み約80基の横穴を調査した上ノ原横穴墓群をはじめ、30ヶ所の遺跡及び推定地で試掘・本調査を実施してきた。この工事に伴う発掘調査は、現在、現道拡幅に伴う宇佐市大根川遺跡と向野遺跡で継続中であるが、中津地区については全て終了した。このため、今年度より順次調査報告書を刊行する計画をたて、今年度は上ノ原横穴墓群・樋多田遺跡を除く佐知一森山間の7遺跡について報告することとした。これらの遺跡については、詳細に報告されておりここではいくつかの問題点を想起して総括にかえたい。

勸助野地遺跡 上ノ原横穴群に接する台地北側端部に位置し、方形周溝墓をはじめ火葬墓等の遺構が調査された。第二章第1節の「勸助野地遺跡の調査」では、従来の方形周溝墓を「方形墳」と表現したが、これは弥生時代の方形周溝墓と区別のために用いた表現である。弥生時代と古墳時代の方形周溝墓には、構造上に特記すべき相違は認められないが、古墳との間には、方形周溝墓は主体部を地山に掘りこみ、当初から盛土を強く意識しているとは思えない。また、4～5世紀代の古墳は、周溝を共有することはほとんどなく、これに対し方形周溝墓は宇佐市赤塚古墳周辺、竹田市楠野遺跡方形周溝墓群^{註(1)}など溝を共有する例が目立つ。

このように古墳と方形周溝墓の間には、造営上の意識の違いがみられ「方形墳」と表現するにはまだ多くの問題を残す。また、近年は弥生時代終末期の墳墓についても、古墳との関連が論議されており、あらためて「古墳とは何か」を問い直す時期にきている。

さて、その方形周溝墓は1号が5世紀初頭から前半代に位置づけられ、2号は4世紀代にさかのぼることが指摘された。この時期の方形周溝墓は、日田市草場第二遺跡、直入町牧ノ原遺跡^{註(2)}など普遍的な分布をみせる。1号方形周溝墓は、中心主体である石棺より、剣、鋤先、鹿角装刀子、堅節、玉類の出土があり、地域共同体の有力な首長墓と考えられる。また、その近親者とみられる2号主体は石蓋土壙を、3号主体は木棺が用いられており、さらに1～3号方形周溝墓の西側には、石蓋土壙墓、木棺墓、土壙墓が分布し、それぞれの方形周溝墓に関連する状況でグルーピングされるのは興味深い。

そして、5世紀後半にはこの西側斜面に横穴墓が造営され、それが8世紀代にまで継続し、8世紀後半～9世紀代にかけては再びこの台地上に火葬墓が造営され、4世紀後半～9世紀に至る一連の埋葬形態と変遷を明確に示す意義深い調査といえる。

黒水遺跡 縄文時代と中・近世を中心とした遺構・遺物が検出されたが、ここでは特に陥穴状遺構が目目される。この陥穴状遺構は、24基が確認されたが時期決定の資料はあまりに乏しい。また、その用途についても、県内では宇佐市本丸遺跡に類例を求められる程度であり、

現状で陥穴と決めつけるのは難しい。ただ、その形態や湿地帯を囲うように存在することから、貯蔵穴や墓壙とすることは否定されよう。そして、関東地方等の類例にもたよれば、陥穴である可能性は十分にあり得る。

中世の遺構では地下式壙が注目される。これまで中津市福島地下式土壙^{註(3)}をはじめ、臼杵市、大野郡、杵築市、安岐町、大分市周辺など幅広い分布をみせ約十数例が確認されている。しかし、実際に調査の行われたのは数例であり、また時期を決定する資料の出土はほとんどみられない。このうち大分市国分寺例^{註(4)}は、国分寺創建以前に位置づけられており最古のものとなる。ところが臼杵市深田・中山地下式壙では五輪塔が確認され、また黒水例での壙内の閉塞に石臼が用いられ、それに混って瓦質の挿鉢が数点出土している。さらに他県の調査例をみても、13世紀から16世紀の間に位置づけられている。従って、国分寺例を国分寺創建以前とするには問題があると思える。地下式壙の用途については、人骨の出土例や、福島地下式壙のように奥壁寄りに礫石による棺床があることなどから、墳墓であることには間違いのないであろう。

池上悟氏は、九州の地下式壙発生の背景を、関東より九州へ下向・土着した御家人との関連を指摘している。しかし、島津・二階堂氏が南九州に下向・土着した地域には、地下式壙との関連^{註(5)}は認め難く、また豊後大友氏に関連する一族は五輪塔などを普及・採用しており、また武士の墳墓とすれば副葬品に何らかの見るべきものがあるはずである。

大坪遺跡 犬丸川左岸の自然堤防上に立地し、古墳時代後期を中心とする集落跡である。平野部におけるこの時期の集落は、ほとんどがこうした自然堤防上や微高地に位置し、水田経営の拡大を裏付けられる。また、大坪遺跡では、伊藤田古窯跡群との関連にも興味が持たれる。

以上、いくつかの問題点について指摘したが、今後は63・64年度に上ノ原横穴墓群、65年に伊藤田古窯跡群、66年度に樋多田遺跡・森山遺跡、67年度に大根川・向野遺跡の報告書を刊行の予定で整理作業ですすめている。この段階であらためて、中津平野における歴史的な変遷と、調査における成果について触れてみたい。

註(1) 大分県教育委員会『楠野』大分県竹田市所在遺跡発掘調査報告書、大分県文化調査第63輯、1983年

註(2) 大分県教育委員会・日本道路公団『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報・日田地区』、1986年

註(3) 中津市教育委員会『中津市福島地下式横穴』、1975年

註(4) 大分市教育委員会『豊後国分寺跡』、1979年

註(5) 池上悟『地下式壙瞥見』立正史学第59号、1986年

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(I)

昭和63年3月28日 印刷

昭和63年3月30日 発行

編集 大分県教育庁管理部文化課

発行 大分県教育委員会

〒870 大分市府内町3-10-1

印刷 佐伯印刷株式会社
